

**KAIHO
O-VISION
SIDN
2030**

**KAIHO
VISION
2030**



C O N T E N T S

Prologue	…2
Our Future ～KAIHO2030プロジェクト	…10
Message 会長から	…26
Message 社長から	…27
Our Treasure ～私たちが大切にしていること	…28
Our History ～私たちが歩んできた道	…40
沿革	…54
Our Resolutions ～私たちの決意	…56

はじめに

2018年、社員の有志17名によってKAIHO2030プロジェクトが発足しました。このVISION BOOKは、KAIHO2030プロジェクトのメンバーが学んできた、会宝産業の歴史や、創業以来大切にしてきた行動規範をまとめたものです。プロジェクトでは、2030年に起こる社会や環境、私たちのライフスタイルの変化を見据えて、どのように行動していくかを議論してきました。そして、「会宝産業をより良い会社にしたい」という共通の想いのもと、様々な活動を行ってきました。VISION BOOKには、その活動の足跡も収めています。会宝産業が歩んできた歴史と、2030年の未来像。二つの学びは、私たちが、どんなに時代が変わっても大切にしたいこと、時代の流れに応じて変えていくべきこと、不易と流行を明らかにする試みでもありました。私たちが学んだことをこれから会宝産業の仲間になる若い人たちや、会宝産業の想いに共感してくださるパートナー企業みなさまにもお伝えしたい。そして語り継いでいってほしい。そんな想いもVISION BOOKには込められています。会宝産業は、人と自然が共存し共に繁栄する、豊かな循環型社会を夢見ています。VISION BOOKが、みなさまと、そのような未来を語り合うきっかけになれば、これ以上の幸せはありません。

きれいな星。
いつか行ってみたいな。





漆黒の宇宙に浮かぶ、青くて美しい星。
かつては緑の草木が大地を覆い、花々が美しく咲き誇っていた。
さまざまな動物たちがお互いに秩序をもって暮していた。



しかし、みんなが地球から資源を奪い、
海を汚し、空を汚した。
海も、空も、怒っている。
私たちは地球を怒らせてしまった。
もう、取り返しがつかない。

ごみでいっぱい
これがあこがれていた
あの星なの？
もう、もとはにはもどらないの？



分ければ資源。
ごみじゃない。
ここは、宝の山だ。





まだ、希望はある。

ここはみんなの星。
手を携えて作ろう、私たちのまちを。
宝の星にしよう。
私たちの地球を。





Our Future

未来の働き方、会社のあるべき姿を描く
KAIHO 2030 プロジェクトが発足

2018年8月、社員有志メンバーによるKAIHO2030プロジェクトが立ち上がった。このプロジェクトは、2030年の会宝産業の理想の姿をバックキャスト思考で捉え、実行に落とし込むことを目指すプロジェクトである。

自らが2030年の会宝産業を創り上げたいという社員17名が集まり、①健康経営チーム、②商人チーム、③生産改善チーム、④広報チームの4つのチームが発足。後に生産改善チームはファクトリーサイエンティストチームとして改編され、2022年にはリエゾンチームが新たに加わった。





INPUTで読破した本のリスト

『未来化する社会 世界72億人のパラダイムシフトが始まった(ハーバーコリンズ・ノンフィクション)』アレック ロス(著), 依田光江(翻訳)/ハーバーコリンズ・ジャパン

『未来の年表2人口減少日本であなにかに起こること』河合雅司(著)/講談社現代新書

『2030のIoT』桑津浩太郎(著)/東洋経済新報社

『日経テクノロジー展覧2018 世界を動かす100の技術 単行本』日経BP(編集)/日経BP

『自動車産業 20の新ビジネスチャンス』

川島佑介(著), 呉 曉岡(著)/クルーザーズ・メディア

『デジタルネイチャー 生態系を為す汎神化した計算機による侘と寂』落合陽一(著)/PLANETS/第二次惑星開発委員会

『アジア・シフトのすすめ』田村耕太郎(著)/PHPビジネス新書

『ITナビゲーター2021年版』

野村総合研究所ICTメディアサービス産業コンサルティング部(著)/東洋経済新報社

『2050年の世界 英「エコノミスト」誌は予測する』英「エコノミスト」編集部(著), 船橋 洋一(解説), 東江一紀(翻訳), 峯村利哉(翻訳)/文藝春秋

『人工知能と経済の未来』井上智洋(著)/文春新書
『モビリティ進化論』アサー・ディ・リトル・ジャパン(著)/日経BP

『2030年ジャック・アタリの未来予測 一不確実な世の中をサバイブせよ!』ジャック・アタリ(著), 林昌宏(翻訳)/プレジデント社

『10年後の仕事図鑑』堀江貴文(著), 落合陽一(著)/SBクリエイティブ

『シャルマの未来予測 これから成長する国 沈む国』ルチル・シャルマ(著), 川島睦保(翻訳)/東洋経済新報社

『縮小ニッポンの衝撃』NHKスペシャル取材班(著)/講談社現代新書

『2052 今後40年のグローバル予測』ヨルゲン・ランダース(著), 竹中平蔵(解説その他), 野中香方子(翻訳)/日経BP

『ティール組織——マネジメントの常識を覆す次世代型組織の出現』フレデリック・ラルー(著), 嘉村賢州(その他), 鈴木立哉(翻訳)/英治出版

『ビッグ・ピボット——なぜ巨大グローバル企業が「大転換」するのか』アンドリュー・S・ウィンストン(著), 名和高司(日本語版序文)(著), その他/英治出版

『日本未来図2030 20人の叡智が描くこの国のすがた』自民党国家戦略本部(編集)/日経BP

ほか



プロジェクトの足跡

2018年 1stシーズン Visionを描く

- 8月 参加の想いを全員で共有
- 9月 課題本を読破
- 10月 課題本のビブリオバトル
- 11月 未来年表を作成
「これからの働き方・ライフスタイル」
「社会・顧客・業界の変化」
「会宝産業の組織・制度・事業の変化」
- 12月 役員に対してプレゼン

2019年 2ndシーズン Visionを具現化

- ・4チーム(健康経営・広報・商人・ファクトリーサイエンティスト)に分かれ、活動開始
- ・テーマに関する先進事例研究
- ・他社へ視察
- ・勉強会などを企画・実施

2020年 3rdシーズン Keep good work!

- ・4チームによる継続的な活動
- ・毎年の経営方針説明会で活動の進捗を発表

2021年 4thシーズン All KAIHO時代スタート

- ・様々な派生プロジェクトが誕生
(詳細はP.25 参照)

2022年 5thシーズン 共進化の時代

- 6月 リエゾンチーム発足
- 10月 社員食堂完成(健康経営チーム)

ep.1

「会社を良くしたい」という想いを形にするために

メンバー

プロジェクトリーダー：鈴木大詩（海外事業部）

ファクトリーサイエンティストチーム

宮川 裕基（海外事業部）

北野 哲平（生産部）

橋本 悟助（海外事業部）

坂本 光司（生産部）

商人チーム

徳田 誠（アライアンス部）

西野 昌明（国際業務部）

豊谷 直規（海外事業部）

四宮 学（国際業務部）

リエゾンチーム

安田 貴子（国際業務部）

朝倉真珠美（海外事業部）

広報チーム

西本 幸司（国内業務部）

山本 悠生（アライアンス部）

健康経営チーム

高崎 洋二（アライアンス部/農業事業部）

大倉 正人（システム業務室）

山口 未夏（アライアンス部）

小林 宏子（国際業務部）

吉川 智宏（国内業務部）

チーム未定

ウベダ・ルベン（生産部）

アドバイザー：金沢工業大学SDGs推進センター所長 平本督太郎氏

平本督太郎

平本：私は社外顧問として会宝産業に関わってきましたが、社員一人ひとりが何を考えているのか聞きたくて、2016年に鈴木さんと全社員ヒアリングを行いました。それでわかったのは、会宝産業には素晴らしい人たちがたくさんいるということ。だけど、その力がうまく会社の力につながっていないという印象がありました。社長が交代して、ちょうど転換期にある今こそ、社員が自らの発案で会社を良くするためのプロジェクトを立ち上げられないかと思ったのがKAIHO2030 プロジェクトの始まりです。

鈴木：会宝産業の社員は素直でまじめな人が多く、みんな、「会社を良くしたい」という想いを持っている。だけどそれがうまく経営層に伝わらない。その状況を打破するためには、自分たちも経営的視点を持たなければいけない。そのためには学ばなければいけない。学んで積極的に経営層に提案していきたいという想いがありました。KAIHO2030プロジェクトがまさにそのきっかけになると思いました。

まさか手を挙げてくれる人がいるとは…

鈴木大詩

ep.2

会社を良くしたい！
という想いから飛び込んだ

何かが起こりそうな
期待感があった

鈴木：月1回の全体会議で私が「会宝産業を良くするために、KAIHO2030 プロジェクトを発足します」と呼びかけ、「参加したい人は今この場で手を挙げてください」と言いました。正直言って、手を挙げる人がいるとは思いませんでした。以前の会宝産業には、自分から積極的に前に出ようという人はあまりいなかったからです。ところが、17人がすぐに手を挙げてくれました。すごく嬉しかったですね。



西野昌明

西野：鈴木課長が「手を挙げて」と言った時、実はまだKAIHO2030プロジェクトが何をしようとしているのかよくわかっていませんでした。でも、鈴木課長の熱い想いは伝わってきた。何かが起こりそうな期待感から思わず手を挙げていました。



宮川裕基

宮川：あの時はまだ入社して1、2年の新人でしたが、「その場で挙手を」ってすごい募集の仕方だなと衝撃を受けました。これは飛び込むべきだと思って、迷うことなく手を挙げました。



徳田 誠

徳田：会社を良くしたいと思っていたので手を挙げました。あれから4年も続いているとは驚きです。このプロジェクトのおかげで会社も自分も変わりました。手を挙げてよかったと思っています。

ep.3

嫌いだっただ勉強が、楽しみに変わった

鈴木：17人でスタートしたKAIHO2030プロジェクト。1年目は、これから2030年に向けて世の中はどう変わるのか、30冊の本を読んで勉強することから始めましたが、脱落者も出てきました。楽しみながらやるって難しいと実感しました。



知らないことを
知って面白い

高崎洋二

高崎：未知のことを学ぶのがストレスで、やめたいと思ったこともあります。だけど、本を読むことで、「知らないことを知る」という楽しみに目覚めました。

西本幸司

西本：勉強が好きなタイプではないので、本を読むのは大変でしたし、私の参加する広報チームは2名しかなくて、業務との両立が大変でした。3～4回、もうやめようかと思う危機がありましたが、そのたびに平本先生や鈴木課長が親身になって支援してくれて。周囲の助けがあったからこそまで来られた。

大倉正人

大倉：私はグループ会社しながらプロジェクト活動をしていました。会社での業務は自分に向いてなくて悩んでいました。近藤社長から、「会宝産業に来て学べばいい」と言ってくださって、2020年から会宝産業に入社しました。もともと勉強は好きではなかったのですが、学んだおかげで「このままではダメだ」と気づけたし、「もっと勉強しなければ」と思うようになりました。勉強の楽しさにも気づくことができました。

ep.4

新世代メンバーも増えてきた



橋本 悟助

橋本：以前からプロジェクトメンバーが楽しそうに活動している姿を見て、憧れていました。2030年の未来を考えると、今後は人口も縮小し自動車の台数もどんどん減っていく。このままでは仕事なくなるといった危機感がありました。今後、いかにして仕事を作っていくべきか。それを自分たちで考えて実現したいと思い、KAIHO2030プロジェクトに参加しました。

北野：普段は橋本さんと現場作業をしています。橋本さんからKAIHO2030プロジェクトで工場のデジタル化について勉強していることを聞いたり、「今やっている作業が自動化したらいいよね」と話をしているうちに「これは自分が今後関わるべきことだ」と興味がわいてきて、2020年に参加しました。

北野 哲平



これは自分が関わるべきことだと思った



豊谷 直規

豊谷：UAEへの異動が決まり、辞令の発表があった2018年の全社ミーティングで、KAIHO2030プロジェクトのメンバー募集があり、その時は参加を断念しました。断念すると同時に、いつか2030プロジェクトのメンバーから参加を強要されるくらいの人材へと成長したいと思っていました。2021年に商人チームの皆さんからお声をかけていただきプロジェクトメンバーとなりました。商人チームのメンバーは経験も知識も豊富で私の良きロールモデルになっています。

安田：会社を良くしたいという気持ちはずっとあり、KAIHO2030プロジェクトには以前から興味がありました。でも敷居が高いと感じていましたし、通常の業務だけでも忙しいのに自分には無理だとずっと逃げていました。ただある時思ったんです。子どもには「やってみないとわからない」とよく言うのですが、「そういう自分はどうなの？」と。仕事が忙しいことを言い訳にしてきましたが、自分もとにかくやってみようと、2022年4月からメンバーになりました。



安田 貴子



ウベダ・ルベン

ウベダ：プロジェクトに興味はありましたが、自分には何もできないと躊躇していました。仕事に慣れてきたので2022年ようやくメンバーになりました。2030のメンバーはみんな、他人のためにがんばっている。そして楽しそうです。まだどのチームに入るか決めていませんが、プロジェクトの活動は自分の勉強にもなるし、それを活かしてみんなの働きやすい会社づくりに貢献していきたいです。

ep.5

高い視座から物事を見られるようになった

小林宏子

全体を見るという感覚が
わかった



小林：以前は未知のことを勉強したり、新しいことに挑戦することに対して不安やネガティブな気持ちがありました。でも、プロジェクトに参加したことで、普段の業務では会わない人ともたくさん出会って、その方たちから刺激をもらって視野が広がりました。今では、新しい出会いや挑戦を楽しめるようになりました。また、今までは自分の業務のことしか考えていませんでしたが、プロジェクトの運営も手伝うようになって「全体を見る」という感覚がわかってきた気がします。

橋本：最初は、課題にぶち当たる度に悩んでいましたがそのうち免疫ができて、「これはやるしかない。やるためにどうしたらいいだろう」と前向きに考えるようになりました。プロジェクトを運営する立場に立ったことで、予算の見通しを立てたり、それを会社に負担してもらっただけでなく補助金を探すという発想もできるようになりました。会社に損失を出さないためにどうするかといった、経営的な視点も持てるようになりました。



宮川：プロジェクトに参加したことでリサイクル事業全体を広くみられるようになりましたし、本をたくさん読んだことで、2030年やその先の長期的な視野で物事を考える力がつきました。社長にお願いして慶応大学のファクトリーサイエンティスト講座に参加させていただき、異業種の方々と未来の工場がどうあるべきかについて語り合ったことも非常に勉強になりました。KAIHO2030プロジェクトに参加したからこそ、より高い視座を持てるようになりました。



西本：最初は本を読むのがなぜ会社に関係あるの？未来にどうつながるの？と思っていましたが、次第に今まで学んだことがかみ合ってきて、各チームでいろいろなことが実現していった。すごいなと思いましたね。他チームの成功を見て自分もがんばらなければと励みになりました。



ep.6

社員が自発的にやりたいことをやる会社が変わった



鈴木：自分のやりたいことをやっていい、自発的にやったことが会社から評価される。これは価値観の大きな変化でした。メンバー自身も変わりました。以前は、自分の業務さえこなしていればいいと思っている人が多かった。しかし、今は、会社のために良いと思えば、業務の枠を超えて協力し合う。自分からどんどん提案をして実践する。しかもそれを楽しんでいる。こういう風土を作ってくれた社長に感謝しています。



徳田：プロジェクトができる前は、「こうなったらいいよね」と理想を話すと笑われたり、「やりたくない」という声も結構ありました。しかしKAIHO2030プロジェクトが立ち上がったことでそういう雰囲気がなくなり、「良いことをやろうよ」と照れることなく言えるようになりました。そこがすごく大きな変化だと思います。意見が違って喧嘩にならず、前向きに話ができるようになりました。

照れずに理想が
語れるようになった

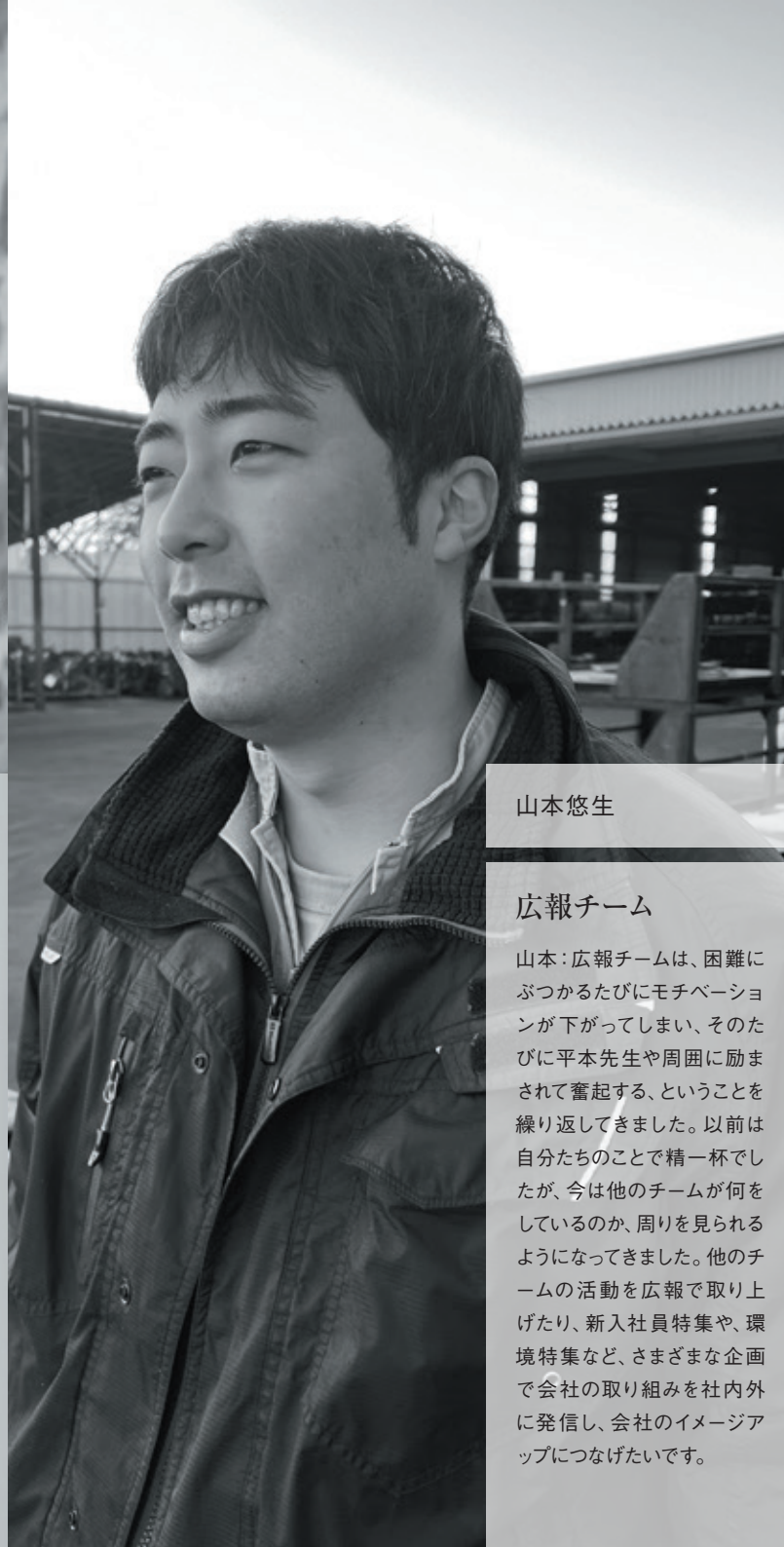


安田：2030ができてから会社は劇的に変わったと感じています。社長がKAIHO2030プロジェクトの活動を認め、それに投資をしたということ、就業時間内にプロジェクト活動をするのを認めたこと、それが大きかったと思います。

健康経営チーム

高崎：健康経営チームの活動によって、健康の知識が増えました。自分にも役立つし、家族や社内の人にも共有し役立ててもらえる。社員の健康に良いことを発信し、健康について考えるきっかけになればと思っています。プロジェクトと業務の両立は大変ですが、自分に興味があり好きなことだからやっています。楽しんでやっているからこそみんなが共感してくれるのだと思います。

小林：2022年10月に社員食堂が完成しました。食は体や心の健康にも影響しています。皆さんの健康を保つことが会社の成長にもつながります。私たちの健康＝地球の健康にもつながります。「健康になる食堂」をビジョンとして、会宝産業にかかわるすべての人が心身ともに幸福を感じる空間づくりを目指しています。将来的には、インドやUAEにも広げていきたいです。



山本悠生

広報チーム

山本：広報チームは、困難にぶつかるたびにモチベーションが下がってしまい、そのたびに平本先生や周囲に励まされて奮起する、ということを繰り返してきました。以前は自分たちのことで精一杯でしたが、今は他のチームが何をしているのか、周りを見られるようになってきました。他のチームの活動を広報で取り上げたり、新入社員特集や、環境特集など、さまざまな企画で会社の取り組みを社内外に発信し、会社のイメージアップにつなげたいです。



ファクトリー サイエンティスト チーム

宮川：当社の生産工程は50年変わっていませんが、今、デジタル化にチャレンジしています。

橋本：2030年までに、工場の解体作業を全自動は無理でも半自動までには進めたい。既にインドの工場で稼働が始まっています。インドのスタッフと、解体パターンを分析し、ロボット化、マニュアル化できるかを検討しています。同時に、ファクトリーサイエンティストチームでできたものを他社へも展開できるか、検討していきたいです。



リエゾンチーム

安田：会社を良くするために大事なものは人材です。人材を良くするためには、自分も含め、みんなが学ばなければならない。その思いからリエゾンチームを立ち上げました。今後は、月1回の勉強会をスタートさせます。業務とプロジェクトの両立は大変ですが、その経験は自分の成長につながり、やがて会社への貢献にもつながります。私自身が、今それを実感しているので、同じ経験を現場の人にもしてほしい。とくに、今まで学びから遠かった人に参加してほしいと思っています。



商人チーム

西野：海外で仕事をしたいという社員のために、海外で働くためのマニュアルを作ったことが商人チームの始まりです。その後、海外商材取引、三国間取引を提案し実現することができました。自分達で考えたことを成し遂げたことで自信になり、達成感を味わうことができました。すごく良い経験になっています。メンバー4人中3人が部課長職でしたが、UAEから畳谷さんが参加してくれたことで、チームが若返りました。海外の生の情報も入り、いろいろな視点で物事を考えられるようになりました。2030年の先、我々の産業がどうなっているのか、勉強して未来を察知し、課題を克服していきたいです。





鈴木：社長の願いは、会宝産業の中で、新しいプロジェクトが次々と立ち上がること。3年間で10個を目標に新しい事業をつくり、それを稼げるモデルにしていくこと。今はまだトライアンドエラーの段階ですが、少なくとも、同じ課題を持つ同業、異業種の方々の悩みにも応えてあげることができる。自分達が常に新しいことにチャレンジしてきたので、そのしくみそのものが売りになると思います。

平本：私は日本政府のSDGsの今後の方針を検討する会議に参加していますが、そこで問題になるのは、日本は自国だけ、自分の地域だけに注目しがちだということ。しかしそれではSDGsは達成できません。まず発展途上国など他国のために何ができるかを考える。そうすればいずれは自分たちにリターンが返ってきて自国も自分の地域も潤う。そういう発想が必要です。つまり、ローカリゼーションとグローバル化のダブルスタンダードを持つ必要があるのです。皆さんの発表を聞いて、会宝産業の皆さんは、すでにそのような発想をお持ちだということがよくわかりました。この3年間でみなさんは大きく進化しました。私が何も言わなくても自らプロジェクトを回していける力がつきました。自分たちが楽しみながら取り組んでいるからこそ、その熱意が他の社員にも伝わって、互いに支え合おうという形に発展している。近藤社長がいつも言っておられる「全体性」＝全員で経営していくんだという形に確実につながっていると感じます。みなさんは、まだまだ進化できると思います。今後にも期待しています。



商人チーム

四宮学(国際業務部)

良いものをお客様に提供するためには未来予測が必要。プロジェクトに参加することでそれが学べると思いました。活動を通して知識がつき、また異業種や他社からの視点で自社を見ることができるようになりました。自分一人ではなかなか踏み出せない一歩が、みんなの協力で実行できるようになりました。辛かったのは、日々の業務の合間に勉強の時間を確保すること、分厚い本の内容が頭に入らなかったこと。チームとしての課題はまだたくさんあります。プロジェクトで実現したいのは、「会宝産業に言えば欲しい部品が手に入る」という状態にすること。ECサイトやオークションなどで少しずつ繋がり、実現しつつあります。自分たちの活動が成果に繋がることにやりがいを感じています。



ファクトリーサイエンティストチーム

坂本光司(生産部)

「自分たちで会社を変えていく」という鈴木課長の言葉に、チャレンジしようという気持ちが芽生えて参加しました。何が始まるのかなというドキドキワクワク感がありました。

プロジェクトに参加し、人材派遣という新規事業にチャレンジしました。会宝産業から経験豊富な人材を派遣させていただくことによって、アライアンス先の解体の効率化、利益向上にも貢献できます。今後はさらに派遣先企業を拡大していきたいです。

プロジェクトに参加したことで、他社とのネットワークが広がり、仕事の幅が増えました。他のメンバーも、リーダーとして、外部へも情報を取りに行く人が増えたと思います。

2030年までに海外向けの商材を確保できる人員をたくさん育成し、素材が安定的に確保できるようにしたい。その結果、アライアンス先の利益、引いては会宝産業の利益にもつながると思います。



健康経営チーム

吉川智宏(国内業務部)

今よりも会社を良くしたい、ずっと会宝産業で働きたいと思ってもらえる会社にしたという想いからプロジェクトに参加しました。未来のことを考えたり、本を読んで学んでいく中で、健康経営チームの活動が自分の中でピッタリだと思いました。

プロジェクトに参加したことで、以前は苦手だった、期日を決めて計画的に行動することができるようになりました。また、PCが使えるようになったことは大きいですね。

プロジェクトによって社内の雰囲気も変わりました。業務以外での接点が増えてコミュニケーションが活発になり、いい雰囲気になってきたなと思います。会社も成長してきているので、自分ももっと成長しようと思うようになりました。あのとき手を挙げて良かったと思います。今後も、会社の人をもっと笑顔にしていきたい。楽しい会社になりたいと思っています。



リエゾンチーム

朝倉真珠美(海外事業部)

プロジェクトチームは、社長や外部の先生を巻き込んで目標を設定し、活動しているのが印象的で、憧れの目で見ていました。でも、自分も主体的に参加して、何か会社に貢献したいと思って参加しました。プロジェクトに参加することで会社の最先端の情報を知ることができ、自分が学べる場が増えるという期待もありました。

社員たちが研修・教育する場があればもっと会社が発展するのではと思ってリエゾンチームに参加しました。

全社を巻き込んで研修会や勉強会を運営するにはたくさんの準備が必要です。今までは受け身だったので気づきませんでしたが、主体的に行動することで大変さがわかりました。

今後は、チームとして人財コンサルタント業を立ち上げたい。2030年にはどんな人財が求められるのか、今後もっと勉強し、社内にもアウトプットしていきたいです。



健康経営チーム

山口未夏(アライアンス部)

プロジェクトで何をやるかわからないけど、会社の未来に関わりたいたいと思って手を挙げました。自分の行動によって、周りの人に良い影響を与えられるようになりたいとも思っていました。千葉の業務との両立が難しくあまり参加できなかったのは辛かったです。でも、小林さんも忙しい中、「やりたい!」という気持ちで行動しているのを見て、自分もがんばれています。

チームの成果の一つとして、今年10月に社員食堂が完成しました。最初は、食堂づくりに対して否定的な雰囲気もありましたが、だんだん社内の健康に対する意識が高くなってきていると感じます。社員食堂で終わりではなく、今後も、「会宝産業に関わるすべての人が心身ともに健康で幸福を感じる空間のプロデュース」というチームのビジョンを達成していきます。食堂が軌道に乗れば、テーブルフォースにもチャレンジしたいです。





健康経営チーム

【メンバー】

高崎 洋二(アライアンス部・農業事業部)
吉川 智宏(国内業務部)
大倉 正人(システム業務室)
山口 未夏(アライアンス部)
小林 宏子(国際業務部)

【発足時の想い】

人生100年時代を生きる私たちが、いつまでも健康で生き生きと働くためには心と体が健康であることが何よりも大切。会社の枠を超えて皆が健康で元気に働ける環境を作りたい。

【ビジョン】

会宝産業に関わる全ての人々が心身ともに健康で幸福を感じる空間のプロデュース

【具体的な活動内容】

2019年

8月：他の健康経営優良法人へ企業訪問
9月：収穫祭 食育ワークショップ開催
12月：マクロビオティック調理実習参加

2020年

1月：勉強会「無農薬栽培/マクロビオティック」
3月：勉強会「食品添加物について」
：AskDoctors導入、普及活動
：健康経営優良法人2020認定
11月：社内全面禁煙開始

2021年

1月：社内勉強会実施「がんについてVOL.1」
3月：健康経営優良法人2021認定
5月：社内クラブチーム発足
：社内勉強会実施「がんについてVOL.2」
7月：ロハス農園様(山口県)コラボ
8月：社内の健康に関する行動調査実施

2022年

1月：勉強会「アイケアについて」
3月：健康経営優良法人2022
ブライト500認定
6月：ゼロ・ウェイスト宣言都市
徳島県上勝町訪問
8月：社内勉強会実施
「メンタルヘルスについて」
10月：社員食堂完成

【チーム活動の意義】

良い会社を自分たち全員で創る。そのためには、社員一人ひとりが健康で、生き生きと働くことができる環境が大切です。私たちの働き方はこれから大きく変化することが予想されます。しかし、人間の身体健康管理は、歴史に学ぶことができます。日本人が大切にしてきた食に対する姿勢・知恵を取り入れることは、心身ともに充実した生活を送るヒントになります。当社は、社員が生涯健康で働ける環境づくりを目指してきました。そこで、健康や食事に関する勉強会を定期的開催したり、社員向けに食事を振る舞うなど、学ぶだけではなく行動にも移すことで、社員一人ひとりがその効果を体感できる取り組みを行ってきました。その実践の積み重ねのおかげで、当社内で食堂を建設することができました。会社の福利厚生・制度を、自らが提案しつくり上げていく。それを実践しているのが、まさに健康経営チームなのです。



健康経営への取組が、webメディア「にじいろBIZ」で紹介されました。

広報チーム

【メンバー】

西本 幸司(国内業務部)
山本 悠生(アライアンス部)

【発足時の想い】

会宝産業の社会的価値、「あとしまつ」の概念を全世界に浸透させたい。

【ビジョン】

地球上に住むすべてのひとたちに「あとしまつ」の大切さを伝える

【具体的な活動内容】

2019年

- ・「いしかわ環境フェア2019」に参加
ドアミラーを活用したスタンドミラーの
ワークショップ開催
- ・当社のテレビコマーシャル作成

2020年

- ・社内広報誌「One Kaiho」の発行
部署紹介と社員特集

2021年

- ・社内広報誌「One Kaiho」の発行
- ・「エコフェスいしかわinWEB」に参加

2022年

- ・社内広報誌「One Kaiho」の発行
- ・「いしかわ環境フェア2022」に参加
シートベルトを活用したペットボトルホルダー
のワークショップ開催



【チーム活動の意義】

解体・リサイクルの仕事＝3Kというイメージが強く、また事業が社会・環境にどれほど貢献しているのか、一般の方々に認知されていません。日常生活になくてならない自動車が、使用済になった後に、どのような運命をたどっているのか、多くの人は知りません。有限な地球資源の中で、私たちがこれまで通りのライフスタイルを継続するためには、地上資源のリユース・リサイクルが必要です。自動車は最先端の工業製品であり、さまざまな金属資源、希少金属が使用されています。それらを有効活用するためには、精緻な解体技術が必要です。と同時に、これからは動脈産業と静脈産業が一体となって、リサイクルフレンドリーな製品設計、産業構造を作っていく必要があります。サーキュラーエコノミーの実現に向けて、まずは私たちリサイクル事業者から、この大切さを発信し、社会へ認知を広げています。

商人チーム

【メンバー】

徳田 誠(アライアンス部)
四宮 学(国際業務部)
西野 昌明(国際業務部)
畳谷 直規(海外事業部)

【発足時の想い】

副部長の四宮(当時 課長)の「海外に行きたい」「広い世界でビジネスがしたい」「世界中が舞台や!」「日本を飛び出せ!!」という想いが発端。それを実現するために必要なことや手順を整えるために結成。

【ビジョン】

- ・世界中の人を自動車中古部品で結ぶ会社を作る
- ・やりたいことにチャレンジできる仕組みを作る

【具体的な活動内容】

2019年

- ・社内の業務標準化/マニュアルの策定
- ・海外市場調査@シンガポール共和国
トリニダード・トバゴ共和国への販売

2020年

- ・商品マスターデータベースの構築
- ・UAEにて市場調査。現地調達から海外販売

2021年

- ・次世代自動車の動向に関する市場調査
- ・三国間貿易の着手
UAE→ボリビア
インド→南アフリカ

2022年

- 1-9月 UAE→ボリビア エンジン合計829台を出荷

【チーム活動の意義】

2020年、世界の新车販売台数は約7,700万台、世界全体の車両保有台数は13億台にものぼります。そのうち、日本車は3割を占め、世界中で日本車の部品のニーズがあります。一方、それらの日本車の多くが日本で生産されているのではなく、海外で生産され、海外で使用されています。私たちは、日本で生産されて日本で使用された自動車の中古部品を海外へ輸出してきましたが、海外のお客様から、日本では生産されていない日本車の部品の注文を多くいただくようになっていきます。今後も海外のお客様のオーダーに応じていくためには、海外でお客様の求める商品を調達・出荷する能力が私たちに求められます。これまで培ってきた海外拠点のネットワーク(例えばインドやUAEで、お客様の求めるエンジンを調達・出荷している)を活かし、会宝産業＝世界に存在する中古自動車部品のどんな注文にも応えてくれる会社、そんな存在になれるように取り組んでいます。これから世界ではEVシフトが進み、日本メーカーが得意としてきたガソリン・ハイブリッドエンジンの販売は禁止されていく恐れがあります。そうなった場合にも、私たちは、世界中の補修部品を求めるお客様に商品を届けるために、希望の商品を調達・出荷できる体制を作っていきます。



ファクトリーサイエンティストチーム

【メンバー】

坂本 光司(生産部)
宮川 裕基(海外事業部)
北野 哲平(生産部)
橋本 悟助(海外事業部)

【発足時の想い】

50年間変化のなかった生産現場を、最新技術を活用することで変革させるべく、現場主導のメンバーで発足。

【ビジョン】

新技術を取り入れ、これからの自動車リサイクル技術のバイオニアとして地球が喜ぶ変化を起こし続ける

【具体的な活動内容】

- 2018年
- ・ 未来技術の調査
- 2019年
- ・ ファクトリーサイエンティスト講座@慶應大学へ参加(宮川・坂本)
 - ・ 石川県 AI・IoT・RPAを活用した業務効率化・省力化支援事業採択

2020年

- ・ スキャナ・AI・OCR・RPAを活用した生産部品登録の簡素化システムの導入
- ・ 生産進捗の見える化システムの導入

2021年

- ・ ファクトリーサイエンティスト講座へ参加(宮川・橋本)
- ・ 石川県IoT補助事業への補助金申請

2022年

- ・ RFIDタグの導入(棚卸・出荷時の作業簡素化)
- ・ 生産工程のDX化
- ・ 工場自動化に向けた解体マニュアルの作成

【チーム活動の意義】

自動車リサイクル業界は、製造業以上に多品種・多様な品質状態の商品を扱うため作業の標準化が難しく、作業工程の省力・自動化や情報管理のデジタル化が進んでいません。一方で、労働人口の減少、資源循環社会の構築、気候変動対策など、企業として取り組むべき課題は山積みです。

私たちは来る2030年に向けて、AIやIoTを始めとするデジタル技術を活用し、業務プロセスの改善だけでなく、ビジネスモデルそのものを変革していきます。取り組みを通じて組織、企業文化、風土をも改革し、競争上の優位性を確立していくことに私たちの活動の意義があります。誰よりも解体現場を熟知する現場の声を大事にし、自動車リサイクル業界という狭い括りではなく、自動車に関わるあらゆるステイクホルダーが儲かる仕組みを構築し、地球環境にも良い影響を与えていく取り組みを担うのがこのファクトリーサイエンティストチームです。



リエゾンチーム

【メンバー】

安田 貴子(国際業務部)
朝倉 真珠美(海外事業部)

【発足時の想い】

部門・役職を超えたコミュニケーションの場を作りたい。楽しく学ぶ環境を提供したい。そして、その学びを通して個の力を上げ、一緒に成長したいという想いが重なり、「リエゾン(橋渡し)」チームを発足。将来的には、アライアンスメンバー各社が抱える人財育成課題の解決フォローに繋げ、国内だけでなく世界を繋ぎ道なきところに道を作る会宝人を増やす。

【ビジョン】

- ・ 楽しく学べる場を提供し、個々の自律・自立を目指す
- ・ 部署を超え、個から全体が成長し、世界の「橋渡し」をする会宝人を目指す

【具体的な活動内容】

2022年

- ・ 6月チーム発足
- ・ 会宝アカデミーの開催
月刊誌『致知』を活用した対面型勉強会
- ・ 「ファシリテータ研修」の企画開催
- ・ 「伝え方研修」の企画開催

【チーム活動の意義】

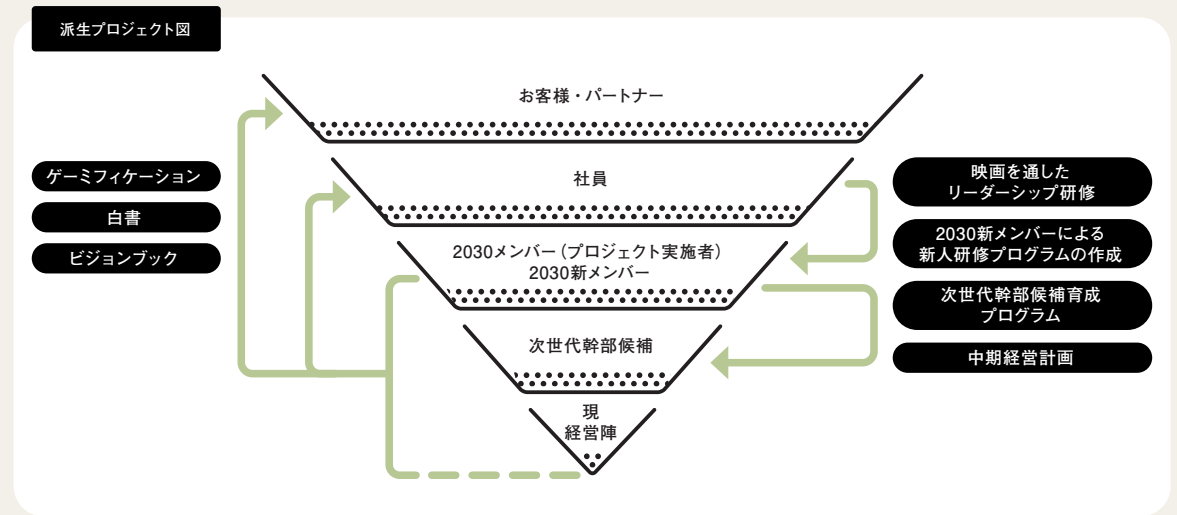
当社の社長は、従来型のカリスマによる垂直型のリーダーシップではなく、組織内の複数の人間、時には全員がリーダーシップを取る、水平型のリーダーシップ、および全員経営を目指しています。私たちは何もないところから、何か新しいものを作り出せるほど、優れたスキル・能力を持っているわけではありません。しかし、既存の知や技術の掛け合わせ・組み合わせによって、新しいものを生み出していくことはできます。そのためには、組織内の全

員が持っている知識や経験を交換するための、対話の場が大切です。対話の場を継続的に作り出し、社員の参加を促し、美点凝視によって、それぞれの強みを掛け合わせて、新しいものを作っていく。技術の進展によって、自動車業界のみならず、これからの社会・経済は大きく変化していきます。その変化に対応するために、自社内だけでなく、同業他社、さらには動脈・静脈産業の垣根を超えて連携し、よりよい社会づくりに貢献できる企業になる必要があります。その土壌を生むために対話の場を、社員一人ひとりが作り出していけるように取り組みます。



派生プロジェクトの紹介

健康経営・広報・商人・ファクトリーサイエンティストの4チームでスタートしたKAIHO2030プロジェクトから、様々な派生プロジェクトが発足し、参加の輪が広がっている。



2020年

映画を通したリーダーシップ研修

KAIHO2030プロジェクトのように、ビジョンを描いて自発的に行動できる社員を増やし、良い会社を創っていききたい。しかし、書籍を読んで、インプット・アウトプットすることはハードルが高い。そこで、映画を通して楽しくリーダーシップを学べるプログラムをKAIHO2030プロジェクトで独自に作成。

次世代幹部候補育成プログラム 「2030経営勉強会」

会社全体の意思決定に関わっていくために、将来の経営陣の一員として、過去の成功体験に基づくのではなく正しい判断ができるように、現代の経営理論を学ぶ。

2021年

映画を通したリーダーシップ研修 (創造的コミュニケーショントレーニング)

研修コンテンツを作成、全社員へ展開。KAIHO2030プロジェクト新規メンバーの公募活動。

白書プロジェクト

これからのビジョンを描くにあたって、創業経営者の理念、未来へ引き継いでいくべき行動規範などを編纂する。

2030新メンバーによる新人研修プログラムの作成

KAIHO2030プロジェクト旧メンバーの活動を追体験してもらい、全社へ広げる活動。

2022年

中期経営計画

これまで描いてきた未来のビジョンに基づき、組織の戦略の柱を言語化し、行動に落とし込むための戦略マップを作成する。

ビジョンブック

白書プロジェクトに加え、これまでの全てのKAIHO2030プロジェクトの活動、会宝産業の歴史・理念、ビジョンを冊子にまとめ、社員、ステークホルダーの皆様へ伝えていく。

ゲーミフィケーション

会宝産業の取り組みをボードゲームを通じて、社会へ発信する。役員を含めたKAIHO2030チーム全員で、5チームに分かれ、オリジナルボードゲームを作成。投票で1位になったゲームを、クラウドファンディングを通じて、製品化する。

手から手へ。つなげる想い。 KAIHO2030プロジェクトにエールを

静脈産業の土台はできた。
あとは若い人たちにこの舞台で活躍してほしい

22歳の時に会宝産業の前身となる有限会社近藤自動車商会を立ち上げ、自動車解体業を始めました。当初は会社を大きくすることばかり考えがむしゃらに働いていました。しかし、自分だけが儲けるビジネスはやがて行き詰まります。私は、自動車解体業という仕事を通じて世の中に何か残したい、それこそが私の使命だと考えるようになりました。

当時、「自動車解体業」には、キタナイ、キツイという負のイメージがありました。しかし、人間にも動脈と静脈があって生きていられるように、産業もモノを作る動脈産業と、作ったモノをリサイクルする静脈産業の両方が大事ではないか。キタナイ、キツイイメージのある自動車解体業を静脈産業として、動脈産業に匹敵するビジネスにできないかと考えてきました。これまでの50年間で、そのモデルはできました。日本はリサイクル先進国ですから、今後は途上国がこのモデルを使って静脈産業を広げていってくれることを願っています。

戦後の何もない時代から高度成長期にかけて、ものを作れば作るほど売れた時代は皆、登山の経営を行ってきました。しかし、人口が減少し経済も縮小する今、従来のような登山の経営は成り立ちません。これからは下山の経営をしていく時代です。自分さえよければいいという会社は淘汰されていくでしょう。

今後、あとしまつの仕事、きれいな地

球を残すことに力を注ぎたい。自然が豊かになるほど、多くの人が豊かになります。なぜなら人間は自然に生かされているからです。1969年に人類は初めて月面に降り立ち、漆黒の宇宙に浮かぶ青く美しい地球を見ました。あのとき人類が、地球は有限の星だと気づけたら、温暖化はなかったのかもしれない。

環境を汚すことによって成長するのが今までの産業。これからは真逆になる。自然界を良くするために事業を行う。経済が成長したら地球環境が良くなる。

「あなたからどうぞ」という社会を創ったら、いっぺんで地球がきれいになります。まだ希望はあります。

2008年に農業をスタートしました。これからの日本は、地域に根差した一次産業が大変重要になると考えたからです。日本の食料自給率はわずか37%です。農産物輸出国が紛争に巻き込まれるなどしたらたちまち日本は食糧不足に陥ってしまいます。そうなるからでは手遅れです。高齢化で農業従事者は減少しています。であれば、企業がそれをやる。若い人も農業に従事できるモデルを作りたい。

漁業にも進出しました。リサイクルの車体を利用した漁礁を設置し、海藻を増やしてCO₂吸収量を高める実証実験を能登半島の七尾湾で開始しています。海水に鉄(フルボ酸鉄)を入れることで、海水の鉄濃度が上がり、光合成が加速し、

Message from

Norihiro Kondō

CO₂吸収量が増加するのです。地球環境保全にも貢献できる取り組みです。

2018年より、社員主体でKAIHO2030プロジェクトが進んでいます。これは、一つの理想ではないでしょうか。これまで私はトップダウンの経営を行ってきました。しかしこれからは、志ある者たちが協力しアイデアを出し合ってボトムアップでビジネスをつくっていく時代です。時代が変わればビジネススタイルも変わります。

私は、「相手を儲けさせることでこちらも儲かる仕組み」を作ってきました。静脈産業の土台も作ってきました。これからの若い人には、この舞台の上で力を発揮してほしいと思います。

会宝産業株式会社 取締役会長
近藤典彦



A portrait of Takayuki Kondo, a middle-aged man with dark hair and glasses, smiling. He is wearing a light blue button-down shirt under a dark grey blazer. The background of the portrait is a solid light green color.

Takayuki Kondo

Message from

2018年、金沢工業大学の平本督太郎先生を社外顧問に迎え、会宝産業は新しく生まれ変わろうとしていました。これまでの会宝産業は、現会長の強力なリーダーシップのもと、静脈産業のパイオニアとして、世界初の試みに次々とチャレンジしてきました。しかしこれからは、社員自らが未来の会宝産業のビジョンを描き、一人ひとりが経営者マインドをもって実践していく。そんな会社にしていきたい。その想いを具現化する出発点となったのが、KAIHO2030プロジェクトです。

2018年8月の経営会議で、海外事業部の鈴木大詩課長がプロジェクトのキックオフを宣言し、参加者を募ったところ、

社員一人ひとりが主体的に経営にコミットし、共に進化していく。それがあべき姿

約80人の社員のうち17人が即座に手を挙げました。私は驚きました。これまでは、自ら行動を起こす積極的な社員が少なく思っていたからです。私は常々「良い会社に入りたい人はいない。良い会社を自ら創る人に入ってほしい」と言ってきました。そのとき手を挙げた17人はまさに「良い会社を自ら創ろう」と手を挙げてくれたのです。

KAIHO2030プロジェクトがスタートしてから社員たちが目に見えて変わっていくのを実感しています。以前は、新しい仕事を頼まれると不安そうな顔をする者が少なくありませんでした。しかし、KAIHO2030プロジェクトが始まって以来、たくさんの書籍を読んで勉強し、社外の人たちからも学び、実際に自分たちの手でプロジェクトを遂行する経験を通して、新しいこと、未知のことへの挑戦が、自分の成長につながるかとわかってきたのでしょう。躊躇するどころか、「ぜひやらせてください!」という声が聞かれるようになりました。プロジェクトメンバーだけでなく、他の社員にもその変化が広がっていると感じます。

当初、健康経営チーム、商人チーム、生産改善チーム、広報チームの4つから始まったKAIHO2030プロジェクトですが、2021年度には14個もの新規プロジェクトが立ち上がりました。自分の専門だけで

なく他部門も巻き込んだプロジェクトが増えているのが最近の特長です。通常業務でも、以前は縦割り思考がありましたが、今では部門を超えて当たり前に協力し合う姿が見られるようになりました。これはまさに、私が目指していた、全体経営であり、共進化(＝共に進化すること)です。

この数年間で、会宝産業も社員たちも大きく成長しました。そして私は、彼らから多くのことを教えられました。

以前の私は、数値目標を達成することが第一の喜びでした。しかし今は、社員の成長を見ることが何よりの楽しみです。数値目標を達成しても喜びは一瞬です。しかし、社員の成長という喜びは後々もずっと残るのです。

教育＝エデュケーションの語源は、エデュカーレ(educare)＝「引き出すこと」と聞いたことがあります。上から教えるのではなく、もともと持っているものを引き出すという意味です。会宝産業には素晴らしい社員がたくさんいます。彼らが内に秘めている力を引き出すのが私の役割です。そして、彼らとともに、会宝産業を社員が誇りに思える会社にしていきたい。そのためにも、静脈産業の重要性を世の中に知らしめ循環型社会の要として、世界のモデルとなっていくことを目指していきたいと考えています。

会宝産業株式会社 代表取締役社長
近藤高行

Our Treasure

～私たちが大切にしていること

会宝産業の社員たちが
創業以来大切にし
繰り返し唱えてきた、
そして今後も語り伝えたい
教えや考え方を
紹介します。



あ・つ・つ・ と・か・く・ し・う・る・ ま・責・責・ つ・任、 の 任、 責任



自動車のあとしまつを通して
日本、世界の環境に貢献します
世界では約7,795万台の新車が販売されています。そのうち日本車のシェアが最も大きく、33%を占めています。日本の経済成長を支えてきた自動車産業ですが、その一方で、世界には使用済みの自動車があふれ、違法廃棄や廃液・廃油の垂れ流しなどによる環境破壊、劣悪な労働環境での解体作業を行う途上国の人々など、負の側面ももたらしました。

資源からものをつくるのが「動脈産業」なら、作ったものを再使用・再資源化し循環させるのが「静脈産業」です。つくるだけでなく、誰かがあとしまつをしなければなりません。**「動脈産業」と「静脈産業」が一体となって循環することで持続可能な地球が可能になる**のです。

私たちは「静脈産業」のパイオニアとして、自動車のリサイクルを通して循環型社会の実現に貢献しています。

た ら い の 法 則

まずお客様が 幸せになることから考える

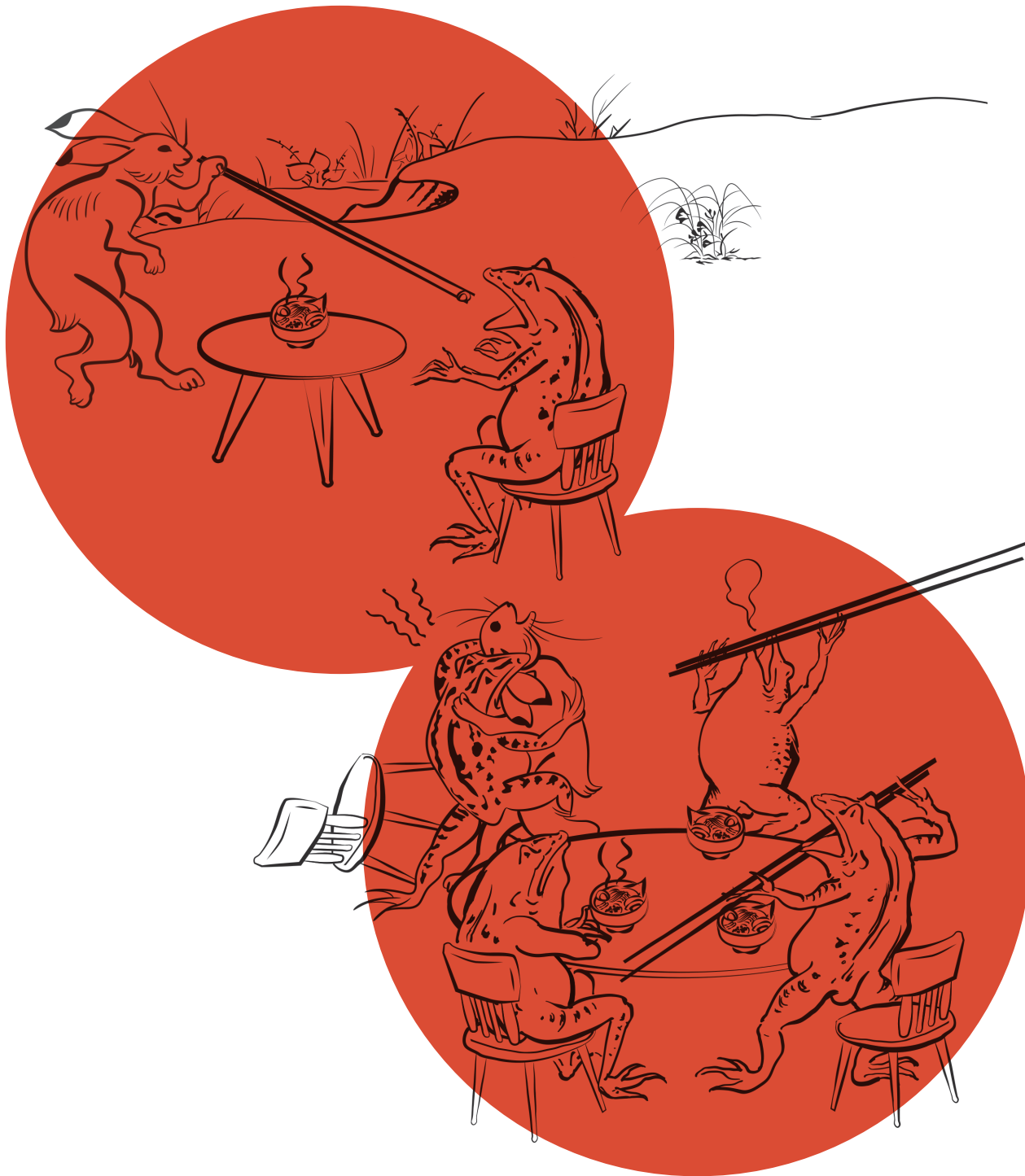
たらいの法則は、創業者の近藤典彦が若き日に母から学んだ教えです。たらいの水の上に漂うたくさんの泡を「自分の手元にかき寄せてごらん」と典彦の母は言いました。典彦は泡をかき寄せようとしたが、かき寄せてもかき寄せても泡は手の脇から流れ出てしまいます。「そのやり方ではいつまでたっても泡は手に入らずいつか消えてしまう。自分のところに寄せたければ泡をむこうへ押し出すんだ」。母のその言葉どおり、泡を両手でたらいの向こう側に押し出すと、泡はたらいの壁にぶつかって両側へ分かれ側面に沿ってゆっくりと手元に集まってきたのです。母は言いました。「自分の手元に寄せたいものは、まずそうやって優しく向こうにやるものだ。自分で抱え込んじゃいけないんだよ」と。**相手をまず幸せにすることで、自分にも幸せが訪れる。**これは「利他の心」といい、仏教の教えの一つです。そして、会宝産業のすべての社員がよりどころにしている行動指針でもあります。



極楽の箸と地獄の箸

**利他の心は、自分だけでなく
関わる人すべてを幸せにする**

仏教の教えの中に「三尺三寸箸」のたとえがあります。地獄も極楽も、食卓で使っているのは、三尺三寸(約1メートル)もある長い箸です。地獄では、この箸で食べ物を自分の口に入れようとしてうまくいかず、怒り出したり、醜い争いが起こっています。ところが極楽では、同じ箸を使っているのにみな歓談しながら楽しく食卓を囲み、満腹になっています。何が違うのでしょうか。極楽の人たちは食物を箸でつまむと、食卓の向い側の人へ「どうぞ」と食べさせ、食べた相手も「ありがとう。今度はお返しします」と、向かい側の人へ食べさせているのです。これも、たらいの話と同様、利他の心を説いています。相手が儲かる仕組みをつくることによって、自分も儲かるようになっていく。**利他の仕組みが、関わる人すべてを幸せにするのです。**



全員経営、共進化



自分たちで理想の会社を創り、共に進化していく

良い会社に入りたいという人はたくさんいます。しかし、会宝産業は良い会社に入りたいという人は、いません。「自ら良い会社を創りたい」、そういう人に来ていただきたいと思っています。どんな会社に入っても、100%自分の思い通りの会社なんてありません。そのときに、「思っていた会社と違った」と言って辞めていくのか、不平不満を言いながら働き続けるのか。どちらを選ぼうと自由です。でも、そんなことを繰り返していても何も変わりません。であれば、**自分たちで努力して自分たちが理想だと思う会社に変えていけばいい**のです。会宝産業は、社員一人ひとりが経営者マインドをもって、会社を良くするためにやりたいことができる会社です。そのために勉強する場や成長できる環境もあります。失敗も学びです。自ら行動し、挑戦し、共に進化を目指しましょう。

あいさつ日本一

心のこもったあいさつは コミュニケーションの基本

日本では昔から、「礼に始まり礼に終わる」という言葉があるように、気持ちのよいあいさつは日本人の美德でありコミュニケーションの基本です。会宝産業では、始業時に本社工場で社員が向かい合って整列し、大きな声で「おはようございます」「ありがとうございます」と、あいさつの訓練をしています。そしてお客様がお帰りになるときは、事務フロアーの社員全員が立って「ありがとうございました」とお辞儀をします。**「心のこもった日本一のあいさつをしよう。」**は、会宝産業の会宝人十ヶ条の第一条に掲げられています。



自動車解体業のイメージを一新し、 環境ビジネスに発展させる

自動車解体業の仕事には「キタナイ、キツイ、キケン」の3Kのイメージがありました。自動車解体業を静脈産業として世の中に認知してもらい、環境ビジネスに発展させるためには、この3Kのイメージを払拭する必要があります。そこで会宝産業では、まず**工場を、常に整備されている世界一きれいな工場にしよう**と考えました。整備が行き届いた工場は、安全で生産性も向上します。そこに働く社員たちも自分の仕事に誇りを持つことができます。今、会宝産業の倉庫には1,000基におよぶエンジンが整然と並んでいます。そこにはもはや、かつての「キタナイ、キツイ、キケン」のイメージはどこにもありません。

きれいな工場世界一

船の舳先になる



静脈産業の旗手として常にチャレンジ、一歩前への精神で

解体業から自動車リサイクル業へ。そして、地球規模の循環型社会を創ることを事業目的としたグローバル企業へ。会宝産業は約半世紀の歴史のなかで、つねにフロンティアスピリッツを忘れず自らを進化させてきました。その原動力は「船の舳先になる」という覚悟です。誰かが先陣を切らなければ業界は変わりませんでした。誰かが前に踏み出さなければ地球環境は危機に陥ります。ならば私たちがやろう、と。

自動車を生産する動脈産業と再利用する静脈産業がバランスよく機能し、限りある資源が円滑に循環してこそ持続可能な社会が実現します。

未来に生きる子どもたちに美しい地球を残すために、私たちの挑戦はこれからも続きます。

三歩以上
かかる用事は
走ってすませる

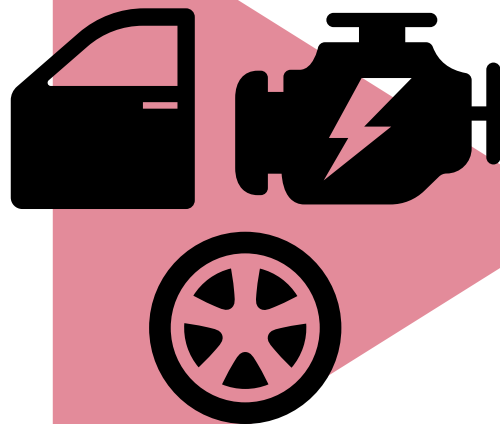


知識・技術の不足は 創意工夫で乗り越える

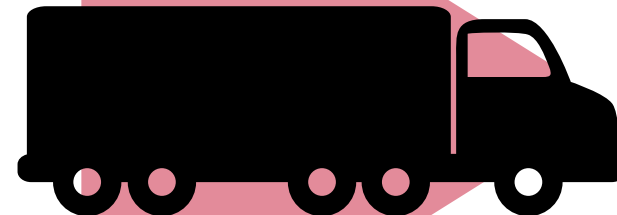
「三歩以上かかる用事は走ってすませる」。これは、自動車修理工場で働き始めた典彦が肝に銘じていた言葉です。18歳で自動車修理業という未知の世界に飛び込んだ典彦は、工具の名前すら知らず、自動車修理の知識や技術ありませんでした。素人の自分にできることは下働きしかない、靴磨きやトイレ掃除を率先してやりました。「できることから人に尽くせ」という幼い頃からの父の教えが脳裏にあったからです。そしてもう1つ、典彦が心掛けたのが、「三歩以上かかる用事は走ってすませる」でした。他の人よりも知識や技術が足りない分、人より速く仕事をする事でカバーしようとしたのです。**「だれもが最初は素人。だからこそ、努力と工夫が必要」**。この教えは会宝産業の社員教育にも取り入れられています。



入庫



中古部品生産



出荷

業界に先駆け 商品管理 システムを 構築

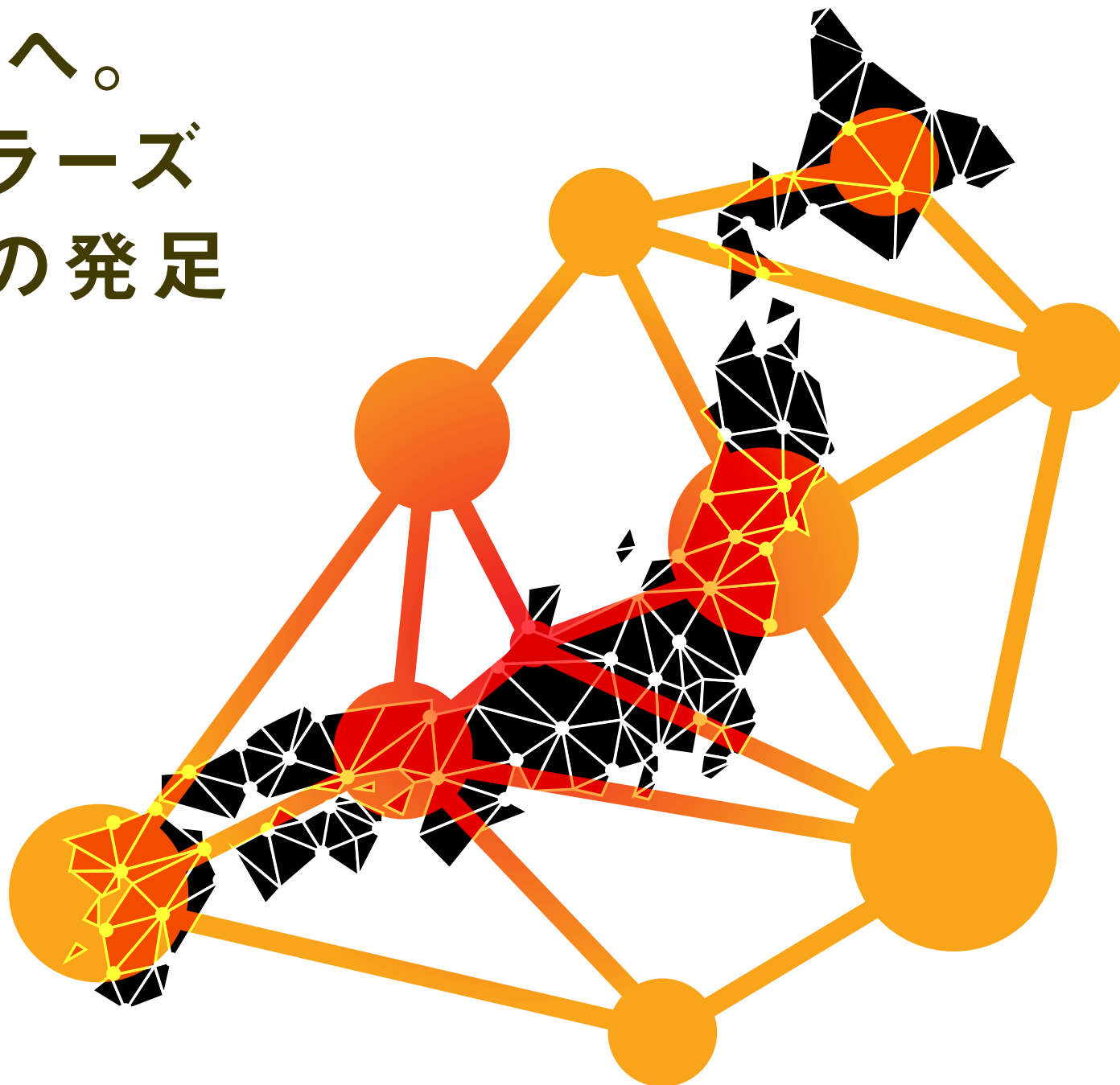
お客様に安心を提供するための 規格化・システム化

会宝産業では、2004年にKRA(Kaiho Recyclers Alliance)システムという商品管理システムを構築しました。KRAシステムは部品の在庫状況や販売履歴、価格などの情報だけでなく、何年式のどのような状態の中古車から取り出されたものか、どのような処理が施されたか、などの詳細な情報を一元管理しています。これらの情報は、インターネットを通じて、提携の同業他社や世界中のお客様が見ることができます。KRAシステムによって、**従来は不透明な部分も多かった中古部品の取引が明瞭になり、お客様も安心して部品を購入することができるようになりました。**

競争から協調へ。 会宝リサイクラーズ アライアンスの発足

互いに手を携え、 環境保全に貢献する

会宝産業は、自動車リサイクル事業に特化した、経営分析・仕入れ調達・海外輸出の一括サポートを受けられる次世代のアライアンス、「KRA(会宝リサイクラーズアライアンス)」を発足しました。根底にある想いは、「競争から協調へ」。加盟企業は、KRAシステムの利用や過去の販売実績の閲覧、輸出に関する情報収集、海外への販路拡大、廃車査定による収益予測、同業者間の情報共有などのサービスを受けることができます。会宝産業一社でこれらを占有するのではなく、加盟各社に公開・共有することで、業界全体の発展を図り、**自動車リサイクル事業を質の高い環境ビジネスに引き上げることを目指しています。**



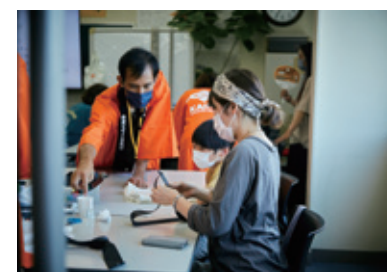
※現在の加盟企業は北海道から沖縄まで85社(2022年10月現在)。100社を目指して協力企業を開拓中です。

Local Action

「もったいない」と「あとしまつ」について楽しく学ぶ

会宝産業では、毎年8月に「会宝リサイくるまつり」を開催しています。目の前でクルマが解体されていく迫力ある解体ショーや、フォークリフト試乗体験、タイヤボウリングや部品釣りゲーム、リサイクルやアップサイクルについて学ぶワークショップなど、楽しい企画が盛りだくさんのイベントです。会宝産業が行っている、**自動車リサイクルについて、地域の方々に知っていただくだけでなく、特に子どもたちに「もったいない」と「あとしまつ」について楽しく学んでいただきたい**という想いで、2011年から毎年開催しています。2022年のワークショップでは、エアーバッグとシートベルトを用いたトートバッグづくり、カードゲームで学ぶSDGs、日本初のゼロ・ウェイスト(ゴミゼロ)自治体・徳島県上勝町の皆さんによる、ごみのリサイクル教室を行いました。







Our History

～私たちが歩んできた道

会宝産業の創業から今日に至るまでの歴史を振り返りながら、会宝産業がどのような想いで静脈産業に取り組んできたか、持続可能な循環型社会に向けて今後どのような役割を担っていくのか、私たちの決意を伝えます。

1969
1991

第一創業期

儲けるから儲かるへ



自分にできることから人に尽くせ

金沢の田舎から都会に出てきて、自動車修理どころか工具の名前も知らずに飛び込んだ自動車の世界。このままでは足手まといになるばかりだと思った典彦は、社長の靴磨きと洗車、そしてトイレ掃除から始めました。

脳裏にあったのは、父から幾度となく聞かされてきた「自分にできることから人に尽くせ」という言葉でした。

新しい仕事を覚えようと必死に働いていた典彦がもう一つ、自らに言い聞かせた言葉は、「三步以上かかる用事は走ってすませる」でした。「最初のうちは仕事で失敗するのは当たり前。普通の人が三步以上かかる用事を走ってすませることで、人の三倍間違えることができる。仕事を覚えるまではそうやって時間でカバーするしかない」と考えたのです。

この考え方は、後に会宝産業の社員教育にも採用され、定着させました。誰もが最初は素人です。だからこそ、努力と工夫が必要だと、典彦は伝えたかったのです。

偶然の重なりが人生を決める

会宝産業の創業者、近藤典彦は、戦後まもなくの1947年2月15日、石川県金沢市に生まれました。父は味噌麴屋を、母は洋品雑貨店を営んでおり、幼いころから生活と商売が一体となった環境で育ちました。人としてあるべき道を厳しくしつけられ、特に父の言葉は典彦の人間形成において大きな道しるべとなりました。

高校卒業後、一度は家業を継ぐことを考えますが、やんちゃざかりだった典彦は、父が商売のために購入した新車の軽四トラックで友人と遊びに出かけ、居眠り運転によって大破させてしまいます。激怒した父親に怒鳴られ、勘当同然で家を飛び出した典彦は、その後、縁あって東京の親戚が経営する中古車販売店に就職。当時は高度経済成長期のただ中にあり、自動車産業は隆盛を極めていました。事故をきっかけに上京し、自動車産業と出会ったことが、その後の典彦の人生を大きく変えたのです。



有限会社近藤自動車商会設立

半年ほど経ち、社長から「将来何をしたいか」と聞かれた典彦は、思わず「金沢で車の修理工場を作りたい」と答えていました。すると、社長が会社の隣に土地を借りてくれ、そこで自動車の修理と解体の仕事をすることになりました。見よう見まねで解体を覚え、事故車や故障車を引き取っては解体し、鉄くずや部品を売る仕事に明け暮れました。

3年が経ち、自動車の解体にも精通し仕事の面白さにも目覚めてきたころに、実家の父が倒れたとの連絡があり、典彦はすぐに金沢に帰郷します。父からは家業を継いでほしいと頼まれましたが、典彦がいない間、味噌麴屋を支えてくれた番頭に店を譲り、自分は自動車解体業を続けることを決意しました。

1969年5月、金沢市金石に有限会社近藤自動車商会を設立。典彦弱冠22歳の創業でした。

大事故からの教訓

経営者の第一の務めは従業員を守ること

創業当初は、典彦一人で早朝から夜中まで、油まみれになって自動車解体の仕事を打ち込みました。翌年、従業員を一人雇い、経営者としての責任感と期待感で胸ふくらませていた矢先、大事故が発生します。従業員が中古車の解体作業中、残留ガソリンにバーナーの火が引火したのです。

幸い命に別状はありませんでしたが従業員は全身に大やけどを負いました。責任を感じた典彦は、きっぱりと廃業することを決意し、従業員のご両親に頭を下げました。ところが、ご両親から返ってきたのは意外な言葉でした。

「あなたはまだ若い。これから辛いことはたくさんあるだろうが、このことでくじけずがんばってほしい」

ご両親の温情のおかげで典彦は廃業を思いとどまり、元気に職場復帰した従業員とともに、生まれ変わったつもりで仕事に向かい始めました。この時、典彦が胸に刻んだのは、「経営者の第一の務めは従業員を

守ること」。この教訓は、会宝産業の基本理念「私の宣言」の中で「私は常に家族のことを思い、安全作業に徹する」とうたわれ受け継がれています。

利益至上主義の経営から下山の経営へ

時代はバブルに突入し、会社経営も順調。右肩上がりに成長していました。いつしか典彦は「もっと儲けよう、もっと会社を大きくしよう」という想いに取りつかれていました。そんな時に、浄土真宗真実派専修寺の僧侶大澤進一師に出会います。

師から「これまでの人生を一度清算しては」と諭され、悩み考え抜いた末、自分のなすべき使命にたどりつきました。それは、「今自分が携わっている自動車解体業を通じて、世の中に何かを残すこと」でした。「もっと上を」と高みを目指す行動にはきりがなく、争いしか生みません。高度経済成長の波に乗り、地球の資源を無限のもののように消費し、いらなくなると捨てるという行動を続けていたらどうなるのか。戦後の日本が奇跡の復興を遂げた原動力は「豊かさへの渴望」です。そして、豊かさを手

に入れると、大量生産・大量消費・大量廃棄の時代に突入しました。しかし、豊かさには限界があります。このままでは資源はいつか枯渇し、いずれ資源の争奪戦が始まるでしょう。

自動車解体・リサイクル業は、一見環境保護に役立つ事業に見えますが、次々と新しい自動車が作られ廃棄されるというサイクルのおかげで事業を拡大してきました。皮肉なことに、廃棄される自動車が増えれば増えるほど業界が潤うという構図となっていたのです。

勝ち抜くこと、利益を上げることばかり追求していたら、いずれは顧客の利益を顧みず、自分たちが生き残ることだけに躍起になる。果たしてこのままでいいのか。顧客もパートナーも皆が幸せになる道はないのか。

時代は1990年代に差し掛かり、バブルは崩壊し日本経済は停滞期を迎えつつありました。地球環境保全への意識が高まり始めたのもこの頃です。

利益至上主義で登り続ける経営から、一転、山を下っていく経営（下山の経営）にシフトしていかなければならないのではないかと。典彦は経営者として、従来の「もっと儲けて、もっと大きく」という価値観に危機感を抱き始めていました。

1969 — 1



991

1992
2000会宝産業の誕生と
新たな事業基盤としての
中古部品輸出

第二創業期

会宝産業株式会社の誕生

1992年、典彦が45歳のときに、有限会社近藤自動車商会の社名を「会宝産業株式会社」に変更しました。社名の由来は、「宝」に「会」える「産業」の場。従業員やお客様が、「宝」と感じる幸せと出会えるように、会社が従業員やお客様という「宝」と出会えるように、そして、この地球上に、自動車リサイクルで「宝」を循環させる産業となるようにという願いが込められています。

「かいほう」という言葉には「開放」「介抱」という意味も含まれています。開放とは何でもオープンにしていること。介抱とは不利な条件に立たされている国や地域、企業など、弱者の身になって一緒に考えられる会社でありたいという願いが込められています。

そして典彦は、下記の経営理念を掲げました。

会宝産業は、
社員一人ひとりがよろこびを表現し、
お客様に信頼と安らぎの実感を提供し続け、
自然環境との調和を図る会社です。

会社が自らの利益のためでなく、従業員や社会、世界の利益のために、利他の精神で行動することにより、幸せが循環していく経営を言葉にして表したものです。

解体屋から自動車リサイクル業へ

社名変更前先立つ1991年、知人の紹介で一人のクウェート人バイヤーが会社を訪れました。そのバイヤーはエンジンやサスペンションなどをコンテナ一台分、総重量にして20トンを買取りました。買取金額は、ほぼ同量の鉄くずの3倍に相当する200万円という高額なものでした。走行距離10万キロを超える自動車のエンジンは、日本では売り物になりませんが、クウェートでは30万キロを超えて走り続けることもめずらしくないといえます。

「他にも同様の国はあるに違いない。自動車部品は、相場の安定しない鉄くずよりもビジネスになる」と、典彦は直感しました。スクラップの山から、使える部品を「宝」として取り出し、リサイクル商品にして海外に売れば、経営も安定し、相手も喜んでくれる。顧客に喜んでもらい、儲けてもらい、自分たちも儲かる。「儲ける」から「儲かる」ビジネスへの転換です。

クウェート人との出会いが、会宝産業が世界に目を向け、解体業から自動車リサイクル業へとシフトチェンジする契機となりました。

次世代に美しい地球を残すために環境ビジネスへと舵を切る

1992年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロで「環境と開発に関する国際連合会議（通称：地球サミット）」が開催され、この頃から環境保全の動きが世界で広がっていきました。日本でも1967年に公害対策基本法を制定、その発展形として1993年には環境基本法を制定しています。そして、2000年に制定されたのが循環型社会形成推進基本法です。この法律は、わが国

が、「大量生産・大量消費・大量廃棄型社会」から、環境負荷の少ない、「循環型社会」へと転換する道筋を示すものでした。

日本が環境保全へ向けて大きく動き始める中、典彦も自動車リサイクル業を通して環境保全に貢献したいという使命感を抱くようになりました。その想いを決定的にしたのは、2001年の初孫の誕生でした。私たちは豊かで便利な生活を享受する一方、地球環境を壊してきました。そのツケを次の世代に回すことはできない。そう思った典彦は、環境ビジネスの確立に向けて、事業の在り方を変えていきました。まず行ったのは、会宝産業の労働環境の改善と、社員教育の徹底です。

自動車の解体業といえば、「キタナイ、キツイ、キケン」の3Kのイメージがありましたが、典彦はそのイメージを一掃しました。「整理」「整頓」「清潔」「清掃」「しつけ」の5Sを社員教育の基本とし、工場内を常に整然とした状態に保つ姿勢を徹底しました。社員の意識を変えることで、仕事の中身をグレードアップしていったのです。



1992 — 2000

HISTORY

2001
2010

静脈産

静脈産業確立への挑戦

業確立期



環境保全への志を同じくする 同業者とのアライアンス

時代の流れが、大量消費から再生へと移り変わっていると痛切に感じていた典彦は、静脈産業の確立に向けて突き進んでいきました。

2002年にはISO14001の認証を取得。これは、社内外に向けて、会宝産業が環境保全に貢献する姿勢を示すことになりました。同年、1,000基におよぶエンジンを保管できる倉庫を増設。翌年には新たな自動車リサイクル工場も建設しました。社名変更当時は6人だった社員数も、30人にまで増えていました。

何億円もの投資を行って事業を急拡大した背景には、2002年に自動車リサイクル法案が国会で承認されたことがあります（2005年から施行）。これが追い風になるという保証はどこにもありませんでしたが、典彦は、あえてリスクを伴う先行投資にチャレンジしたのです。

典彦がもう一つ、力を入れたのは、同業者とのネットワークでした。「これからのビジネスは環境への対応なくしては成り立たない。ともに手を携え、時流に合ったビジネスモデルを構築し、環境保全に貢献していこう」と全国の同業者に声をかけ、アライアンスの同志を集めていきました。そして、2003年に内閣府認証NPO法人RUM（ReUse Motorization）アライアンスを設立しました。

RUMアライアンスは、競争によって生じる無駄をなくそうという想いから「競争から協調へ」を大きなテーマに掲げています。加盟各社は、素材部門に強い企業、国内販売に強い企業、海外販売に強い企業などそれぞれに得意分野を持っています。利益を独占しようとするのではなく、それぞれの持ち味を生かした連携によって、より効率的に製品の供給を行うことができるようになります。お客様にも喜ばれる仕組みなのです。

RUMアライアンスの活動は、自動車リサイクルの品質管理の標準化と啓発、リサイクル技術の向上と人材育成を大きな柱としています。これによって、自動車リサイクル業を質の高い環境ビジネスへと引き上げ、静脈産業としての地位を確固たるものにしていくことを目指しています。

静脈産業の一端を担う 自動車リサイクルのスペシャリストを育成

2007年には、自動車リサイクル技能者養成を目的とした、国際リサイクル教育センター（International Recycling Education Center : IREC）を設立。会宝産業にとって「人」は宝です。その「人」が、静脈産業の一端を担う自動車リサイクルのスペシャリストとして、誇りと気概を持って働いてほしいという典彦の想いが形になりました。

IRECでは、自動車解体の技術だけでなく、地球規模で起きている環境問題のしくみや、自動車の循環を考える大局的な見識を養ったうえでの知識や技能を身につけていきます。

独自の教材として「使用済み自動車（ELV）リサイクルマニュアル」も開発しました。このマニュアルによって、体系的に自動車解体の技術を学ぶことができます。IRECで行う自動車リサイクル技能者研修は、座学（講義）と技能（実習）を組み合わせたカリキュラムです。研修を受け、学科試験と技能試験に合格した者は「自動車リサイクル技能者」として資格認定されます。

2005年に、愛知県で「愛知万博（愛・地球博）」が開催されました。典彦は、これは自動車リサイクル業の重要性を広くアピールする好機ととらえ、RUMアライアンスの加盟企業とともに参加を表明。「理・彩・来（り・さい・くる）、それは地球愛」と銘打った、自動車リサイクルシンポジウムを開催し、経済産業省自動車リサイクル室長、財団法人自動車リサイクル促進センター専務理事、NPO法人フューチャー500理事長、トヨタ自動車理事・環境部長、日産自動車リサイクル推進室部長、中部第一輸送専務取締役といったそうそうたる顔ぶれの方々が登壇。動脈産業と静脈産業の未来について活発な意見が交わされました。

この活動がきっかけとなり、RUMアライアンスは、国際リサイクル会議を開催したり、国際協力機構（JICA）と連携したプロジェクトを立ち上げて海外からの視察や研修を受け入れるなど、その活動は世界に広がっています。

2001

この研修は、地元金沢工業大学の大学院修士課程の一部に組み入れられるなど、社外にも広がっています。

また、IRECは設立当初から、日本での技術者養成だけでなく、世界の人々にも日本のリサイクルノウハウを伝授したいと考えていました。その思いが通じて2010年に、JICAの仲介によりメキシコ、ブラジル、コロンビア、アルゼンチンの環境行政関係者や自動車団体のスタッフ、リサイクル資源取扱業者などが研修に訪れ、熱心に日本の自動車リサイクルシステムのノウハウを学んでいきました。

在庫情報の共有と品質管理を目的としたKRAシステムの構築

2005年に、KRA（Kaiho Recyclers Alliance）システムを開発。国内の同業者と在庫情報を共有するシステムで、車両の仕入れからエンジンや部品の取り出し、在庫、販売に至る履歴をコンピュータで一元管理しています。バーコードを部品に貼付することによりトレーサビリティも確保していま

す。バーコードを読み取ることで、何年式のどんな状態の中古車から取り出した部品なのか、どのような処理を施したのか、同じ種類の在庫はどれだけあるのか、どの顧客の手に渡ったかなどの詳細な情報を知ることができます。

このシステムを開発した目的は大きくは2つあります。一つは、海外からの中古エンジンや中古部品のニーズに応えるためです。日本の自動車部品は性能が良く、世界各国から引く手あまたです。世界各国からのニーズに1社だけで答えるには限界があります。そこで、RUMアライアンス加盟企業と在庫情報を共有し、中古商品の種類や状態が一目で分かる仕組みが必要だと考えたからです。

もう一つは、エンジンという、外見からではその性能を判別することができない製品を安心して取引できるようにすることです。一般的に中古品は売買の履歴があいまいであったり、粗悪なものが紛れていることもあります。そのような不透明性を払拭し、信頼、信用に基づく取引を円滑に進めるために、KRAシステムを開発したのです。

これは、自動車リサイクル業界では画期的なことであり、会宝産業を大きく成長させた要因の一つとなりました。

フェアでクリアな取引のため 独自基準JRSを策定

2010年にJapan Reuse Standard（JRS）という、輸出用の中古車エンジンの品質を評価する独自基準を新たに設けました。これは、世の中に流通する粗悪な中古部品と当社の製品との差別化を図るためのもので、コンプレッションやオーバーヒートの有無、走行距離などを含む6項目をそれぞれ5段階で評価しています。

KRAとJRSによって、フェアでクリアな取引が実現します。それは会宝産業の利益のためだけでなく、業界全体の発展に役立つことだと考えています。

標準（スタンダード）に基づく売り手と買い手の信頼、これをベースとする自動車リサイクルが発展すること、すなわち、静脈産業が発展することで、これまで産業の中心だった動脈産業（ものづくり）と対等な関係となり、真の循環型社会が実現します。限りある資源を循環させることで、環境保全に貢献することが可能になるのです。

農業ビジネスへの参入

2008年、会宝産業は農業ビジネスに参入しました。自動車リサイクルとは全く畑違いのビジネスを始めた理由は2つありました。仕事のため発展途上国を数多く訪れた典彦

は、食糧不足に苦しむ人々を大勢見てきました。今の日本では食糧不足の心配はないかもしれませんが、日本は食糧の約6割を輸入に頼っています。もしも、ひとたび輸入先が紛争に巻き込まれたり、異常気象に見舞われたりしたらたちまち食糧の輸入が困難になり、日本でも食糧が不足してしまうでしょう。しかし、農業従事者の高齢化や後継者不足により、全国で耕作放棄地が増えています。

このような状況に危機感を持ち、農業事業に取り組むことを決めたのです。

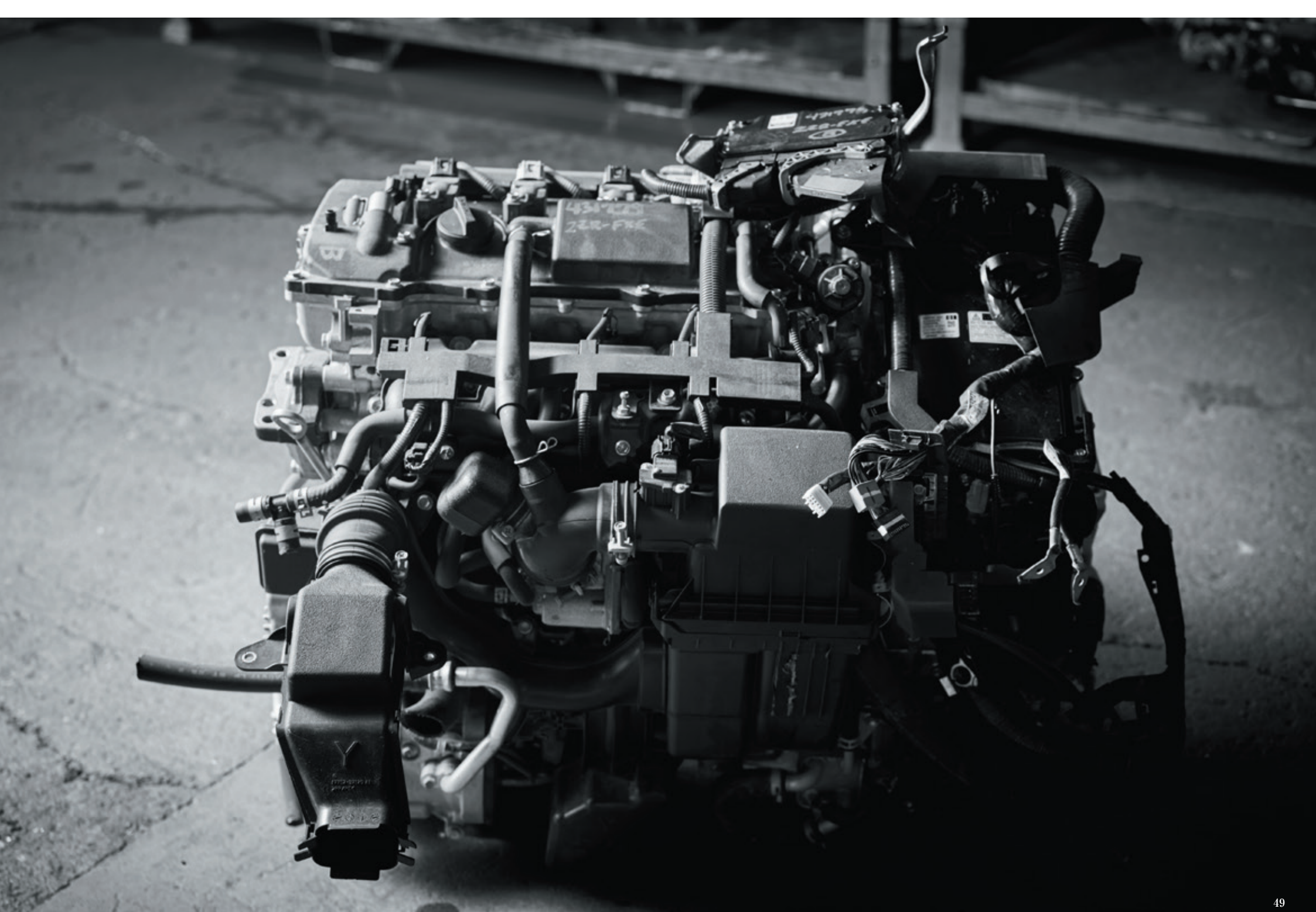
もう一つの理由は、会宝産業の「宝」である従業員が、定年を過ぎても働ける場を作りたいからです。会宝産業の「私の宣言」に「私は生涯 楽しく会宝産業で働く」という一文があります。その宣言を具現化するためにはどうすればいいか、考え抜いた末に、農業事業をスタートしたのです。

能登半島の付け根に位置する宝達志水町の遊休農地を借りてコメと野菜を栽培し、地元の農家の方々に手伝っていただきながら、年々収穫量をアップしています。

2012年には、新しいビニールハウス3棟が完成し、農業事業を本格化。トマトに特化して、年内に20トン以上生産しています。この生産量は石川県では最大規模となります。トマト以外の野菜栽培にも手を広げ、環境や健康に配慮して、有機栽培への移行を図っています。

将来的には果樹栽培や酪農にも事業を広げ、さらにはレストラン運営、イベント開催、ブランド農作物の育成など、農業を核とした地域おこしも構想中です。

2010





HISTORY

2011
2014

地球人として環境ビジネスに貢献する

RUMアライアンスによる同業他社との連携、KRAシステムによる製品の安定供給や品質保証、JRSによる製品評価の標準化、IRECによる自動車リサイクル技能者育成など、静脈産業の基盤づくりを着々と進めてきましたが、典彦には、「環境ビジネスで世界に貢献する」というさらに大きなビジョンがありました。

2000年前後から、典彦は国連の関連機関やJICAの仲介により発展途上国政府の要人や関係者と会う機会が増えていました。どの国でも、使用済み自動車の放置が社会問題となっていました。このままでは取り返し

のつかない環境破壊が起こると危惧しながらも、対策ノウハウを持たず、打つ手がない状態でした。

発展途上国を訪れるたびに、あちこちに野積みされている廃車の山が目に入ります。「環境に国境はない、自国であれ他国であれ、今生きている人が環境を汚したら、そのつけは未来の世代に回ってしまう。国境に関係なく、地球人として、地球環境のために貢献したい」そう考えた典彦は、発展途上国の自動車リサイクルをサポートする活動にも踏み出しました。

海外へのリサイクル事業拡大

2006年にRUMアライアンスによって開催された、第1回国際リサイクル会議は、その後さらに規模を拡大し、2008年に金沢市で第2回国際リサイクル会議が行われました。この会議には、ケニア、南アフリカ、タイ、モンゴルなど22か国の大使や行役、参事官、一等書記官などが出席。各国における自動車リサイクルの現状や、リサイクルに関する法整備や技術者育成が急務であることなどが問題意識として共有されました。これがきっかけとなりRUMアライアンスの存在が発展途上国の政府関係者らに知られるようになり、典彦の活動範囲も大きく広がりました。



グローバル化 促進期

真のグローバル企業へ

2011 — 2014

2008年に開催した第2回国際会議がきっかけとなり、2010年に典彦はナイロビを訪れました。ケニアの政府関係者から使用済み自動車のリサイクルについて相談された典彦は、ナイロビに中古部品販売の合弁会社を設立することを提案。それだけでなく、自動車リサイクル工場をつくることも提案しました。そうすればケニアは自国で中古部品を調達できるだけでなく、使用済み自動車問題の解決にもなります。これは、「地球人として地球環境のために貢献したい」という典彦の願いにも通じるものです。

その後もタイ、マレーシア、インド、インドネシア、シンガポール、ベトナムへと、海外リサイクル事業を拡げていきました。

環成経(かん・せい・けい)の時代

典彦が、初孫の誕生を機に、環境ビジネスへと舵を切ってから20年、環境を第一に考えながらも利益を出し続ける企業の在り方を模索してきました。互いの信頼と協調に裏打ちされたネットワーク、業界全体の発展を目指した標準化・システム化、人材育成、海外展開へと、その歩みを進めてきました。会宝産業の取り組みは、モノづくりのあとし

まつを引き受ける静脈産業として、世界で認められる存在となっていました。

典彦はこうした取り組みを、「環成経」という言葉に収めました。すなわち、持続可能な「環境」を第一に考え、それでも皆が利益を得て「成長」し続ける「経済」です。

大量生産、大量消費、大量廃棄を繰り返して、自分さえ儲かればいいという経済はこれ以上続きません。

地球の未来を第一に考え、まず相手を喜

ばせることにより、自社の利益を持続的に確保し、皆と一緒に経済成長する。それは、創業以来、会宝産業が大切にしてきた「利他の心」に通じるものでもあります。そして、環成経こそが、これからのビジネスの完成形になると典彦は確信しています。

2015年に国連が「持続可能な開発目標」として17のゴール、SDGsを発表しました。まさにこれは、世界規模の環成経といえるでしょう。

2015
2021

第三創業期

事業継承をきっかけとし循環産業構築への挑戦

2015年4月に、近藤高行が「これまで培われてきた会宝精神を確実に継承し、さらなる飛躍を実現するべく邁進していく」決意を述べ、新社長に就任。Do Local will be Globalの精神で「町で一番愛される会社」を目指しつつ、静脈産業のグローバル企業として一歩ずつ歩みを進めることを誓いました。

失敗を経て、原点への回帰

第1、第2の創業期は、前社長であり現会長の近藤典彦の強いリーダーシップによってその歴史が刻まれました。新しく社長に就任した高行は、「前社長と同じことはできない。自分なりの会社運営を行おう」と考えていました。高行が目指したのは、高い数値目標を掲げ、利益を伸ばすことでした。社員にも徹底して「数字を上げること」を求めました。ところが売上は下降線をたどり、社長就任2年目の2017年には、20数年ぶりの赤字を出してしまいました。鉄価格の下落など環境的な要因もありましたが、高行は「99.9%は経営者の責任だ」と、自分を責めました。

悩み苦しんだ末、行きついたのは、これまで何度も会長から聞かされてきた「タライの法則」と「地獄の箸、極楽の箸」の話です。相手をまず幸せにすることによって自分も幸せになっていく。利他の心の教えです。「これが会宝産業の原点だ。原点に立ち返ろう」、そう考えた高行は社員たちに、「数字を上げろ」と言う代わりに「お客様に喜んでいただいていますか」と尋ねることにしました。会宝産業の社員は皆、とても素直でまじめです。高行の想いを理解し、お客様に喜んでいただくために働くようになりました。そしてその結果、会宝産業は翌年、V字回復することができたのです。

SDGsアワードを受賞

会宝産業は、「利他」の精神に則って静脈産業を発展させることによって資源循環型社会を実現し、地球規模の環境課題や社会課題を解決していくことを目指してきました。

日本国内における自動車の適正処理はもちろん、インド・ブラジル・ケニア・マレーシア・南アフリカにおいて自動車リサイクル





政策の立案サポートや現地リサイクル工場設立により、環境に配慮した自動車リサイクルのバリューチェーンの構築と現地雇用創出に取り組んでいます。その活動が認められ、2018年、第2回ジャパンSDGsアワードSDGs推進副本部長賞（外務大臣賞）を受賞しました。

インドでリサイクル事業を本格稼働

会宝産業は、循環社会の要である「静脈産業」のパイオニアとして、自動車リサイクルシステムを発展途上国に技術移転するプロジェクトを複数国で現在展開しています。2020年には、海外初となるリサイクル事業をインドで本格開始。今後、SDGsの17番目のゴール、「パートナーシップ」の通り、現地政府や大学機関、民間企業と連携し、各国で自動車リサイクルモデルを横展開し、地球規模での波及効果を見据え、資源の再資源化を促します。そして、自動車リサイクルバリューチェーン構築と現地雇用創出を通じ、ゴール8「働きがいのある人間らしい雇用」、ゴール12「持続可能な消費と生産」を提供していく考えです。

KAIHO2030プロジェクト

2018年、KAIHO2030プロジェクト活動開始。高行にとって何より嬉しかったのは、それが社員からの発案だったことでした。近い将来、自動車産業は衰退し、自動車リサイクル業も存続できないかもしれない。自分たちで2030年以降の未来の会社のあるべき姿を考えたい、自分たちで会社を良くしたいという社員有志たちが集まって、立ち上がったプロジェクトです。金沢工業大学SDGs推進センター所長の平本督太郎先生にご指導いただき、2030年に目標を定め、そこから振り返って現在すべきことを考える『バックキャスティング思考』で活動を始めました。商人チーム、健康経営チーム、ファクトリーサイエンティストチーム、広報チームが立ち上がり、2022年にはリエゾンチームも発足。従業員主導で、「会社を良くするため」の活動を行っています。

新型コロナウイルスという脅威を 全社一丸となって乗り越える

2020年、新型コロナウイルス感染症の蔓

延により、海外のビジネスが大打撃を受けました。毎年3月・4月は車の買い換え時で繁忙期のはずなのに、赤字を記録。その時、高行が考えたのは「今年はコロナだから赤字は仕方ない。赤字幅を少しでも減らすしかない」ということでした。ところが、「こんな時こそ黒字化せよ」というのが会長の考えでした。しかし方法までは教えてくれません。高行が自分なりに考えすぐに実施したのは、会長と社長、役員の給料を減額したこと。経費も見直し、幹部を集め議論した結果、計画上は2,000万円の黒字までこぎつけました。社員たちにも想いは伝わり、「こんな時こそがんばろう」と士気は高まりました。その結果、2,000万円の予測を大きく上回り、6,000万円の黒字に。このとき高行は、「ピンチだから仕方ない」ではなく、「ピンチだからこそチャンス」だと、身をもって学んだのです。

つくる責任、つかう責任、 あとしまつの責任

会宝産業は、SDGsの12番目の目標である「つくる責任、つかう責任」に、「あとしまつの責任」を加える必要があると考えています。日本だけでなく、海外のあとしまつもしなければなりません。自動車を環境配慮型で解体し、含まれる素材を精緻に分別し、ゼロウェイストを実現する。それがわれわれ静脈産業に従事する者の責任です。

会宝産業は、あとしまつの責任を果たすべく、今後ともたゆまぬ努力を続けていきます。

沿革

1969年 5月	有限会社近藤自動車商会設立	2011年 2月	「ツエーゲン金沢」のオフィシャルスポンサー参加	2017年12月	国連開発計画(UNDP)主導「ビジネス行動要請
1992年 2月	会宝産業に社名変更	2011年 3月	新卒者向けの会社説明会(創業以来初)		(BCtA)」承認(日本企業では11番目)
1998年 8月	新社屋完成	2011年 7月	会宝トマトの一般販売開始	2018年 5月	ジャパンSDGs静脈産業フォーラム開催@国連大学
2002年 2月	ISO14001認証取得	2011年 8月	当社初のイベント「会宝リサイくるまつり」開催	2018年 7月	KAIHO2030プロジェクトキックオフミーティング
2003年 5月	トレジャーチェアー完成		1,779名来場	2018年 8月	シートベルトを活用したビジネスバッグの企画開発
2003年 7月	会宝リサイクルモニュメント完成	2011年11月	第3回アリババサプライヤーアワード受賞	2018年12月	第2回ジャパンSDGsアワードSDGs推進副本部長賞
2004年	KRAシステム完成	2012年 2月	ナイジェリアでの自動車リサイクル事業化調査		(外務大臣)受賞
2004年 2月	RUMアライアンス設立	2012年 4月	ナイジェリア行政官・民間企業へ	2019年	IoTを駆使した先端農場
2005年 1月	自動車リサイクル法 施行		自動車リサイクル研修実施		(羽咋市邑知にビニールハウス一棟完成)
2005年 3月	ISO9001認証取得	2012年 6月	いいねプロジェクト開始	2019年 1月	ロゴ・ブランディングイメージの刷新
2005年 5月	愛知万博 愛・地球博に出展	2012年 6月	「国連持続可能な開発会議」(リオ+20)に出展	2019年 2月	ブラジルで初となる「自動車リサイクルセンター」開所式
2005年 7月	小池百合子環境大臣(当時)と面談	2012年 6月	農業事業本格始動開始 新ハウス3棟が完成		(ミナス・ジェライス州連邦技術教育センター
2006年 1月	石川県ニッチトップ企業に認定	2012年10月	「近藤塾」開催		(CEFET-MG)内)
2006年 5月	第1回国際リサイクル会議開催@国連大学	2013年 8月	第3回「会宝リサイくるまつり」開催 4,286名来場	2019年 2月	インド合併(Abhishek K Kaiho Recyclers
2007年 4月	IREC(International Recycling Education Center)設立	2013年10月	中古エンジン評価規格「PAS777」が英国規格協会から		Private Limited)設立
2007年12月	資本金を5700万円に増資		正式に発行	2019年 6月	全社プレゼン大会開催
2008年 2月	第2回国際リサイクル会議開催@金沢	2013年11月	現会長(当時社長)がEYアントレプレナー・	2019年 8月	第1回環経ビジネスフォーラム開催
2008年 2月	経済産業省主催 中小企業IT経営力大賞 受賞		オブ・ザ・イヤー2013ジャパン	2019年 8月	会宝キッチンスタート
2009年	宝達志水町において農業への取り組みを開始		「東海・北陸地区アントレプレナー賞」受賞	2019年12月	元気手当の導入
2009年 2月	ありがとうカード運営開始	2014年 1月	ラスベガス社員旅行	2020年 1月	Forbes Small Giant Award 2019-2020 GLOCAL賞 受賞
2009年 2月	創業40周年の感謝の集い	2014年 6月	一般財団法人船井財団グレートカンパニーアワード2014受賞	2020年 1月	UAEにてKRA勉強会開催
2009年 2月	会宝農園 廃油ボイラー開始	2014年 9月	カンブリア宮殿放送	2020年 3月	「健康経営優良法人」認定
2009年 3月	第5回ハイ・サービス日本300選 受賞	2014年10月	リサイクルに関する指導者、経営者の育成のため、	2020年 8月	ポケットマルシェ開始
2009年 4月	国連工業開発機関 視察		ブラジル国立工業技術学校トリサイクル技術提携の調印	2020年 8月	労働者派遣事業開始
2009年 7月	環経 kickoff	2014年12月	UAEにて子会社KME設立、世界初の中古自動車	2020年11月	全社禁煙スタート
2010年	中古エンジン品質規格		部品のインターネットオークションスタート	2021年 8月	温室効果ガス削減目標
	「JRS(ジャパン・リユース・スタンダード)」策定	2015年 4月	近藤高行社長就任	2022年 3月	SBTi(Science Based Target Initiative)に認定
2010年 2月	IRECに、ブラジル6名、アルゼンチン4名、	2016年 8月	KMEオークション会場をインダストリアルエリアへ移転	2022年 5月	健康経営優良法人2022ブライト500認定
	コロンビア3名、メキシコ1名の研修生来社	2017年 6月	SDGsビジネスアワード2017「エコシステム賞」を受賞	2022年 6月	SOMPO Light Vortex株式会社との資本業務提携
2010年 4月	「コンバートEV(電気自動車)」プロジェクトがスタート	2017年 7月	Kaiho Truck Net (KTN)オークションスタート	2022年 8月	インド工場開所式
2010年 5月	社内勉強会を実施(賃金の仕組み、KRAシステム、	2017年 8月	会宝リサイクラーズアライアンス創設		海外顧客向け中古車部品販売EC(電子商取引)サイト
	英語、ヨガ、ツイッター、思考ツール)	2017年10月	WIRED Audi INNOVATION AWARD 2017 受賞	2022年10月	「Kaiho Industry EC Site」オープン
2010年 9月	ナイジェリア自動車協議会の政策・企画部部長である	2017年11月	国内部品課新部品倉庫完成		EYアントレプレナー・オブ・ザ・イヤー2022ジャパン
	ママドゥ氏が来社	2017年11月	3年間に及ぶマレーシア行政への	2022年10月	「東海・北陸地区アントレプレナー賞」受賞
2010年10月	第3回国際リサイクル会議開催@大連		自動車リサイクル研修スタート		社員食堂完成
2011年 1月	会宝人十か条が完成				

新しい社員が増えていく中で、会社の歴史を知っている人も少なくなり、またベテランの中でもその歴史認識が人によって変わってきていると感じていました。そのような中、改めて会長が作り上げてきた会宝産業の歴史をまとめたい。他人任せにするのではなく、自分たちで歴史を紐解き、作り上げていきたい。そんな想いを、今回の編集メンバーたちが形にしてくれました。このVISION BOOKで会宝産業の歴史を次世代へ伝え、あらたな歴史の始まりとしたいと思います。

（編集長：近藤高行）

VISION BOOKは、会社の歴史を振り返り、「白書」を作ろうということから始まりました。2022年で、私たちの会社は創業53年目を迎えました。私は35歳なので、私の生まれる前に会長が創業し、先輩たちがここまで育ててくださいました。

人間と同じように、組織も、生まれてから今に至るまでの「記憶」というものが大切だと思います。日々、いろいろなことが起きる中で、その時間や空間を共有し、嬉しいことも辛いことも一緒に乗り越えていく。その経験や記憶を共有しているからこそ、チームの中で心がつながり、良い仕事、大きな仕事ができるようになる。その、阿吽の呼吸のような、互いの微妙な思いが重なっていればいるほど、たとえ物理的に離れていても、一人ひとりが自立し、組織として目指すべき方向に、全力で進んでいくことができる。誰かに言われてやるのではなく、自らの意志で行動していくことができる。それが、個人のやりがいにつながり、そして、チームがまた強くなる。これから世の中で起こる厳しい環境変化の中、私たちは、もっともっと進化し、社会に必要とされる存在にならなければいけません。そんな時に、私たちの会社が本当に大切にしているもの、行動指針が理解できていれば、スピーディーに意思決定、行動できます。だから、会社の記憶、会長が大切

にしてきた理念を、まとめたいと思いました。自分たちのビジョンがどうだ、とか偉そうに言うのではなく、ただ、創業者や先輩たちが大切にしてきた理念を、次世代へ引き継ぐために、このVISION BOOKを作りました。

数十年後も、この会社が社会に必要とされ続けるために、この本が少しでも役に立てば幸いです。

（プロジェクトリーダー：鈴木大詩）

このVISION BOOKの制作にあたり、会宝産業の歴史や創業者が貫いてきた理念や想いに、何度も胸が熱くなることがありました。想いが未来をつくる。会宝産業らしさが詰まったこの一冊が、今を生きる皆さまのおまもりのような存在となれば幸いです。

（小林宏子）

2030プロジェクト「HAKUSHO」の取り組みでは、知っているようでわかっていなかった会宝産業の創業からの歴史を詳しく学ぶ事ができました。日々、会社は大きく変化した急激に成長していると感じる事ができました。会宝産業をお支えいただいているお客様、社員、そしてその家族すべての方々に、会宝産業の現在に至るまでの歴史をわかり易くお伝えしたいという想いで作成されたのがこの「VISION BOOK」です。

（西野昌明）

VISION BOOKを作るに当たってまず振り返ったのが2030プロジェクト。2018年からスタートしてもう5年目になっていて、いろんな学びや体験がありました。VISION BOOKを作ることで、その時に何を考えていたのか、原点に戻り振り返るための良い機会にもなりました。このVISION BOOKがただ昔を懐かしむだけでなく壁にぶつかった時に立ち戻る一助になればと思います。

（大倉正人）

2023年2月18日発行

Publisher:	会宝産業株式会社(石川県金沢市東蚊爪町1丁目25番地)
Editor-in-Chief:	近藤高行
Adviser:	平本督太郎(金沢工業大学SDGs推進センター所長)
Editor:	KAIHO 2030 プロジェクト(鈴木大詩、小林宏子、西野昌明、大倉正人)
Art director/Designer:	前田淳二
Photographer:	戸松愛、戸井田夏子、長丸涼太
Illustrator:	服部ユイチ
Copy Writer:	石井栄子

Our Resolutions	2023年 則天去私 近孫興彦	フュージョン経営 自立した個の融合 2023.1.1 近孫興彦	透明 純化 2023年1月5日 馬場誠	NeXT 2023.1.5 櫻井茂弘	あの 大きな 陽が 照る 2023.1.5 金藤寧彦	自分自身 に問う 2023.1.1 小坂 博之	今 在るもの と 活かす 2023.1.5 山口勉	感謝 2023.1.5 近藤勝枝	ECサイトとUPアール 3回問答会6本以上 20時までには帰社 フルマラソン完走 2023.1.5 田名 孝	積極 進取 徳野 志剛
縁 令和五年 川口 肇	い ろ ろ 令和五年 川口 肇	直に まめに 改、改、 改、改、 2023 徳田誠	声 とまご機油の 高崎洋二	先手 2023年 喜多 学	知行 合一 2023.1.5 大 大	素 為 鈴木大祐	一言 は 一言 2023.1.5 近藤孝		決 断 令和五年 西野昌明	謙 虚 な 心 2023.1.5 西野昌明
自立 中野 洋平	想いは実現する 行動 実行 令和五年 西野 昌明	協調 2023年 坂尾昌憲	語彙力を 鍛える 2023年 坂尾 昌	気を 引き締める 水立義和		走 2023年1月 宮城 晃	即実行 2023年 高井典幸	丁寧に 2023年1月2日 高田崇司	楽しむ 愉 令和五年 野村武司	健康 令和五年 2023
管理 徹底 2023.1.1 小坂	時間 石丸 慎介	余裕 令和五年 西野 昌明	それは 誰のための 仕事か？ 2023年 川村 祥子	努力 三三三 山田 敬和	健康 中島 修	学 勉 B1 鈴木 幸子	感謝する事 家族を大切にす 令和五年 月日 坂尾 昌憲	悔いなき 行動を 令和五年 宮田 康彦	剛質 剛健 2023年 月 宮 誠	・地盤固の ・学業・成長 ・自己改善(1方面) 2023.1.5 野村 武
健康 前田 寛史	謙 虚 令和五年 小西 隆一		志 令和五年一月五日 吉川 智宏	感謝できる 心 令和五年 山田 敬和	人間力 横山 将大	瞬間 「今」大切に 楽しむ 小林 悠子	健康 令和五年 月日 坂尾 昌憲	Refine 豊谷 直規	結 び 2023年 月 西野 昌明	考 梅澤 孝平
心に ゆとりを 持つ 令和五年 中野 洋平	自分に 厳しく 令和五年 中野 洋平	会 令和五年 中野 洋平	継 続 令和五年 中野 洋平	安全 二〇二三年 北野 裕平	正解 金谷 知家	健康 令和五年 米本 隆元	2023年 ブラッシュ アップする 福田 紀子	125kg 100kg 80kg 2023.1.5 山本 悠生	一日 一楽 2023年 月 西野 昌明	在庫管理の 徹底 = 収益改善 橋本 悟助
	独 立 小 野 孝	人スライ 令和五年 中野 洋平	食 島本 悠		強化 生産部 小西 利佳	強化 2023年 月日 坂尾 昌憲	無事故 2023 大野 遼	勤 勉 2023 大野 遼		
健康 生活 令和五年 中野 洋平		もっと いろいろ やろうぜ 令和五年 中野 洋平	トラク ター の免許 が欲しい。 オホリーアン	万事如意 華族	お金 2023年 月日 坂尾 昌憲	将来 ホーアン	健康 幸福 2023年 月日 坂尾 昌憲	平穩無事 2023年 月日 坂尾 昌憲	健康 2023年 月日 坂尾 昌憲	勉強 ミン ケ



